

室町幕府外様衆の基礎的研究

木下 聡

室町幕府内の身分階層として、相伴衆・御供衆・外様衆・奉公衆などが知られている。⁽¹⁾このうち相伴衆・御供衆は二木謙一氏が詳細な検討をしている。⁽²⁾奉公衆については、総体としては福田豊彦氏の基礎的研究があり、また奉公衆を構成する各家についても、幾つかの家について研究がされている。⁽³⁾しかしそれに比して外様衆は、その実体がほとんど明らかにされていない。⁽⁴⁾秋元大輔氏が番帳をもとに構成員などの概要を述べているが、現在外様衆について最も詳しい言及をしているのは西島太郎氏である。⁽⁵⁾西島氏は、外様衆とは大名に次ぐ家格を持ち、年中行事に出仕し、家格としての意味を持つ存在だが、職活動は見られないとしている。そして外様衆の構成については、鎌倉時代以来の家格の高さや、將軍との親近性の高さにより外様衆に編成されたとしている。⁽⁶⁾また番方に編入された者は外様衆に戻れないことも指摘している。⁽⁷⁾ただ実際どのような家の者が外様衆となり、幕府内でいかなる役割を果たしたかは言及が無く、いまだ全く不明のままである。

また通常外様衆と呼ばれる集団の他に国持の外様がいる。「諸大名

已下年中出仕事」⁽⁸⁾では、相伴衆でも御供衆でもない国持大名を「国持之外様」と呼び習わすとし、例式の外様衆と様体は別としている。相伴衆の大名の子で、相伴衆にも御供衆になっていない者も「国持之外様」とされている。さらに「大外様」・「小外様」と呼ばれる者もいた。例えば、永正五年に足利義植・大内義興と共に上洛した益田尹兼は、この大外様に列している。⁽⁹⁾後には足利義昭から三浦元忠も大外様に任じられている。⁽¹⁰⁾小外様については、「殿中行事記録」に見える。⁽¹¹⁾ただこの大外様・小外様と外様衆とがいかなる関係にあるのか、同じであるのかそうでないのかも明らかにされていない。

以下では、外様衆がどのような氏族から構成されていたかを明らかにした上で、幕府内での位置付けと役割について検討したい。

一 外様衆の構成員

外様衆はどのような家で構成されていたのか。「幕府番帳案」⁽¹²⁾（以下

「文安」、「永享以来御番帳」(以下「永享」)、「東山殿時代大名外様

附」(以下「明応」)の各番帳、「長祿二年以来申次記」(以下「長祿」)、

「長享元年九月十二日常徳院殿様江州御動座當時在陣衆着到」(以下

「長享」)、「永正七年在京衆交名」(注7、以下「永正」)、大和家蔵書

九「大和守晴完入道宗恕筆記」(15)内の「外様并大外様の事」及び

「大外様」(以下「大和九」)、「条々事書」(以下「条々」)といった史料

に列挙されているのをまとめると、表1・表2のようになる。なお

それぞれの出典に記された推定年代は、「文安」が文安年間、「長祿」

が国持衆・御供衆の構成員とその官途から長祿二・三年であり、「永

享」は本文に文明十二・十三年頃との記述がある。「長享」は本文に

ある長享元年九月十二日、「明応」は明応元年、「永正」は永正七年の

交名であるのでその年となる。そして「大和九」及び「条々」は、寛

正年中記録とあること、ただし前後に記されている三管領・国持・御

供衆の官途名乗りからすると、若干時代が前後しているが、概ね応仁

の乱以前の状況を示していることから、長祿年間から応仁の乱直前頃

の状況を示すものと推測される。

なお「大和九」は未翻刻史料なので、その前の国持外様の部分と併

せて次に掲げる。

国持外様

斯波修理大夫武衛親類同家様二申人也
世話三下屋形ト申也

、細川民部太輔和泉半国守護也 山名弾正少弼金吾一男也

、同次郎弾正少息也 山名相模守伯耆国ノ守護也

、細川刑部太輔和泉半国守護也 山名兵部少輔右見国守護也

仁木左京大夫伊賀国守護也 山名弾正忠山城国守護也

佐々木京極中務太輔光祿一男也、富樫介加賀国守護也

(朱点) 佐々木六角四郎近江国守護也 赤松次郎法師

(朱点) 土岐美濃守(朱点) 武田大膳大夫若狭、今河修理大夫駿河

(朱点) 山名修理大夫石見国 此分朱点 国持ヲ御相伴二不参之衆大略

外様并大外様の事大略定在国

北畠左衛門佐准国持 細川中務太輔 新田大島左衛門佐 伊賀仁木右

馬助 山名伊豆守 一色右馬頭 新田岩松兵庫頭 吉見太郎 山名

宮田五郎 丹波仁木兵部少輔 四条上杉 中務少輔准国持 佐々木京

極加賀守 江見美作守 土岐民部太輔 赤松新藏人 赤松中務少輔

佐々木鞍智准国持 撰津掃部頭修理大夫 二階堂大夫判官 波多野 町野加賀

守 畠山次郎 末野 佐々木黒田 山名撰津守 北野一色 北畠小

原左兵衛佐殿大 山名鹿野 山名 有道 美濃仁木 鹿草大 細川

土佐守 細川観音寺 細川上野介 細川駿河守 桃井右馬頭 赤

松上月 赤松葉山 土岐佐郎木 佐々木多田 佐々木尼子 土岐鷲

巢 土岐ソカヤ大 山名磯部

大外様

細川土佐守 細川観音寺 山名鹿野 山名磯部 西佐々木七頭 江

見 関 長野 土肥 畠山日向 今河堀越 里見

凡此分此外数多有之

また「条々」も、外様を列举した該当部分は未翻刻なので、同じく

次に掲げる。

一、外様 畠山次郎 末野 赤松新藏人 佐々木鞍智 土岐民部太輔

撰津修理大夫 赤松中務少輔 同名弥郎 佐々木黒田

右人数ハ正月一日計出仕御盃被下候也、御相伴衆国持之事ハ不及申、

五ヶ日御盃被給候也、細川陸奥中務も佐々木賀も外様なから其内に

て被准国持儀也、

(中略)

一、同外様 丹波仁木兵部少輔 伊勢仁木 山名摂津守 北野一色
新田大島 北畠小原左兵衛佐殿 新田岩松 姉小路左衛門佐 里見
吉見 山名伊豆守 山名宮田 山名河口 山名鹿野 山名有道 鹿
草 細川土佐守 細川観音寺 細川上野介 細川駿河守 桃井右馬
頭 四条上杉 赤松上月 赤松葉山 土岐佐良木 佐々木多田、此
外数多在之、如此の方々ハ正月御盃之人数にてはなくて、出仕の日
も相かハリて参賀也、

さて外様衆の各家については、そのほとんどが従来検討されてい
ない。そこで以下では個別に見ていきたい。なお国持外様衆である、斯
波修理大夫家・細川和泉両守護家・山名伯耆守護家・山名石見守護
家・赤松・土岐・若狭武田・今川・六角・仁木・富樫などについては、
守護であり、他の外様衆とは若干性格を異にするのと、外様衆の各家
に比してすでに多くの専論があるので、ここでは省略する。

1 赤松弥五郎

長祿↪寛正頃に活動が見える赤松弥五郎元貞が⁽¹⁹⁾いる。その後文明八
年に宮内少輔の弔いを弥五郎が受けており、この宮内少輔が元貞かそ
の父かは不明だが、この家の官途は宮内少輔であったと思われる。赤
松氏で宮内少輔は、応永年間に大河内赤松満政の官途として見えるの⁽²¹⁾
で、弥五郎は赤松大河内家かとも思われるが、普広院殿三十三年忌仏
事銭納下帳⁽²²⁾に「赤松播磨弥次郎」が見え、大河内家の官途が播磨守で
あったことからすると、大河内家は弥次郎であつて、弥五郎は用いな
いとも考えられる。そこで「文明十一年記」⁽²³⁾を見ると、「赤松越後弥
五郎」が見え、越後守持貞が弥五郎とする系図もあるので、その係累

ではないかと思われる。ただ先述の元貞以降の弥五郎家については不
明である。

2 赤松中務大輔(少輔)

応永↪永享年間に見える赤松中務少輔持祐が⁽²⁶⁾おり、この持祐は永享
九年の時点で上野介となっている。⁽²⁷⁾持祐の活動は文安以降不明となる
が、享徳頃に再び赤松中務少輔が見える。⁽²⁸⁾「赤松家風条々録」⁽²⁹⁾を見る
と、持祐の子に兵庫頭祐利がおり、この祐利の代の終わりに御供衆に
なったとあり、そうすると年代的に「長享」・「明応」の外様衆に赤松
中務家がいないことの説明がつく。また「赤松家風条々録」をもとに
した持祐の系譜は則祐―持則―持祐―祐利―則実である。

なお応仁以降の赤松氏で、中務を名乗る一流として塩屋・龍野赤松
氏が著名である。その初代政秀は下野守として知られるが、息子則
貞・村景が中務少輔であることから、最初の官途名は中務少輔であつ
た可能性もある。ただ政秀と持祐・祐利との関係は不明である。政秀
が文明十三年に行つた逆修を還暦の時とする説をとれば、享徳の頃の
中務少輔は政秀の可能性も残るが、政秀が中務少輔であつたこと、こ
の一流が外様衆であつたことを裏付ける史料が現状無いので、本稿で
は外様衆赤松中務家は持祐・祐利父子であつたとしたい。

3 赤松七条

赤松新藏人は「長祿」に「七条事也」とあることから七条赤松氏で
あるとわかる。この七条赤松氏は範資の子に始まる一流で、「赤松家
風条々録」には赤松氏の中でも高い家格を持つとある。その系譜は諸
系譜をもとにすると次のようになる。

永享	長享	明応	永正
赤松中務少輔 赤松新藏人 一色右馬頭 四条上杉中務少輔 江見美濃守 北畠左衛門佐 佐々木京極加賀守 佐々木鞍智 摂津掃部頭 土岐民部大輔 二階堂大夫判官政行 丹波仁木兵部少輔 伊勢仁木左馬助 新田大島左衛門佐 新田岩松兵庫頭 波多野 細川中務大輔 町野加賀守 山名伊豆守 山名宮田五郎 吉見太郎	赤松上月治部少輔 赤松葉山※ 赤松民部大輔※ 畠山四郎 一色兵部大輔 一色宮内少輔 一色次郎 上杉 佐々木中務少輔※ 佐々木田中四郎兵衛尉 摂津中務大輔※ 千秋宮内大輔尚範 富樫介 土岐次郎※ 土肥刑部少輔 二階堂山城判官 仁木 新田大島兵庫頭 野間左馬助入道 野間民部大輔 波多野因幡守 細川伊予守 細川民部大輔 細川五郎 細川土佐九郎太郎 細川駿河四郎※ 町野加賀守 桃井右馬頭 山名相模六郎 山名宮田五郎 山名宮田兵庫頭※ 山名刑部大輔※ 吉見右馬頭	赤松又次郎 同弥五郎 同上月甲斐守 同兵庫頭 同葉山三郎 荒河治部少輔 一色右馬頭 同兵部大輔 同五郎 上杉中務少輔 江見伊豆守 佐々木越中守 佐々木加賀守 佐々木能登守 同朽木 同田中 同遠江守 同隠岐守 摂津掃部頭※ 土岐佐郎木右馬助 同池尻刑部少輔 同曾我屋民部大輔 同鷲巢右馬頭 同明智中務少輔 土肥美濃守 二階堂判官※ 仁木兵部大輔 仁木中務少輔 伊勢仁木 新田岩松 同大島 野間左馬助 波多野※ 畠山日向守 同駿河守 細河実草刑部大輔 同駿河守 同伊予守 同土佐守、観音寺 同弥六 天竺中務少輔 町野※ 山名有路 吉見右馬頭	一色右馬頭 上杉右衛門佐 上野才寿丸 江見兵部少輔 摂津兵庫守 二階堂次郎 仁木次郎 仁木左京大夫 伊勢仁木右馬助 細川陸奥守 細川小四郎、奥州子 益田治部少輔 町野

表1 各史料における外様衆一覧

文安	長禄	大和九	条々
赤松弥五郎 赤松中務太輔 赤松上月大和入道 赤松上月治部少輔 荒川八郎 一色兵部太輔 一色宮内少輔 今川神原 上杉三郎 江見八郎次郎 小原左兵衛佐 佐々木越中守 佐々木加賀守 佐々木能登守 佐々木朽木弥五郎 佐々木鞍智 佐々木黒田四郎 佐々木完道 佐々木田中三郎兵衛 佐々木永田四郎兵衛 佐々木山崎 佐々木横山 佐々（仁カ）木中務少輔 摂津掃部頭 千秋宮内太輔 土岐池尻五郎 土岐佐良木三郎 土岐民部太輔 土岐鷲巢九郎 土岐明智中務少輔 土肥美濃守 土肥次郎 二階堂山城判官 仁木千代菊丸 仁木兵部太輔 仁木小太郎 新田兵庫頭 野間右馬助入道 波多野因幡守 細川陸奥守 細川駿河守 細川完草 麻崎 町野備後守 桃井右馬助 山名草山与次郎 吉見右馬頭	赤松新蔵人七条事也 赤松治部少輔入道、有馬事也 同弥次郎 佐々木鞍智紀伊守 末野 摂津掃部頭之親 土岐民部大夫 畠山次郎	赤松中務少輔 赤松新蔵人 赤松上月 赤松葉山 姉小路左衛門佐 一色右馬頭 北野一色 今河堀越※ 四条上杉中務少輔 江見美作守※ 北畠小原左兵衛佐 北畠左衛門佐 西佐々木七頭※ 佐々木京極加賀守 佐々木鞍智 佐々木黒田 佐々木尼子 佐々木多田 里見※ 末野 関※ 摂津掃部頭 土岐佐郎木 土岐ソカヤ 土岐鷲巢 土岐民部太輔 土肥※ 長野※ 二階堂大夫判官 丹波仁木兵部少輔 伊勢仁木右馬助 美濃仁木 新田大島左衛門佐 新田岩松兵庫頭 波多野 畠山次郎 畠山日向※ 細川中務太輔 細川駿河守 鹿草 細川土佐守※ 細川上野介 細川観音寺※ 町野加賀守 桃井右馬頭 山名河口 山名伊豆守 山名摂津守 山名宮田五郎 山名有道 山名鹿野※ 山名磯部※ 吉見太郎	赤松中務少輔 同名弥郎 赤松新蔵人 赤松上月 赤松葉山 姉小路左衛門佐 北野一色 四条上杉 北畠小原左兵衛佐 佐々木加賀守 佐々木鞍智 佐々木黒田 佐々木多田 里見 末野 摂津修理大夫 土岐佐良木 土岐民部太輔 丹波仁木兵部少輔 伊勢仁木 新田大島 新田岩松 畠山次郎 細川陸奥中務太輔 細川駿河守 鹿草 細川土佐守 細川上野介 細川観音寺 桃井右馬頭 山名伊豆守 山名摂津守 山名河口 山名宮田 山名有道 山名鹿野 吉見

- ・「大和九」の※は大外様であることを示す
- ・「長享」の※は異本の「室町殿在陣衆名簿」にのみ見える名前を指す
- ・「明心」の※は名前が評定衆のところにあるが便宜外様衆に入れたことを指す

表2 外様衆家別一覧

	家	文安	長禄	大和九	条々	永享	長享	明応	永正	種別
1	赤松弥五郎	○	○		○			○		3
2	赤松中務大輔	○		○	○	○				3
3	赤松七条		○	○	○	○				3
4	赤松上月大和守	○		○	○			○		3
5	赤松上月治部少輔	○	○				○			3・4
6	赤松上月兵庫頭							○		3
7	赤松葉山			○	○		○	○		3
8	姉小路向			○	○					3
9	荒川	○						○		4
10	巖島						○			5
11	一色兵部大輔	○					○	○	御供	3
12	一色宮内少輔	○					○			3
13	一色次郎						○			3
14	一色右馬頭			○		○		○	○	3
15	一色北野			○	○					3
16	一色五郎							○	御供？	3
17	今川神原（蒲原）	○								3
18	今川堀越			○						3
19	上杉四条	○		○	○	○	○	○	○	4
20	上野								○	4
21	江見	○		○		○		○	○	5
22	北畠小原	○		○	○					3
23	北畠左衛門佐			○		○				3
24	佐々木越中	○		○				○		3
25	佐々木能登	○		○				○		3
26	佐々木朽木	○		○				○		3
27	佐々木田中	○		○			○	○		3
28	佐々木永田	○		○						3
29	佐々木山崎	○		○						3
30	佐々木横山	○		○						3
31	佐々木鞍智	○	○	○	○	○				3
32	佐々木黒田	○		○	○					3
33	佐々木完道	○								3
34	佐々木尼子			○						3
35	佐々木多田			○	○					3
36	佐々木加賀守	○		○	○	○		○		3
37	佐々木遠江守							○		3
38	佐々木隠岐守							○		3
39	佐々木大原									3
40	里見			○	○					3
41	末野		○	○	○					3
42	関			○						5
43	摂津	○	○	○	○	○	○	○	○	2
44	千秋	○					○			5
45	中条									4
46	土岐池尻	○						○		3
47	土岐佐良木	○		○	○			○		3
48	土岐曾我屋	○	○	○	○	○		○		3
49	土岐鷲巢	○		○				○		3
50	土岐明智	○						○		3
51	土肥	○		○			○	○		5？
52	長野			○						5
53	二階堂	○		○		○	○	○	○	2
54	仁木丹波	○		○	○	○		○	○	3
55	仁木伊勢	○		○	○	○	○	○	○	3
56	仁木美濃	○？		○						3
57	新田大島			○	○	○	○	○		3・4
58	新田岩松	○		○	○	○		○		3

59	野間	○				○	○		5
60	波多野	○		○	○	○	○		2
61	畠山次郎		○	○	○				3
62	畠山日向守			○			○		3
63	畠山駿河守						○		3
64	細川奥州家	○		○	○	○		○	3
65	細川鹿草	○		○	○		○		3
66	細川天竺						○		3
67	細川弥六			○	○		○		3
68	細川観音寺			○	○				3
69	細川駿河守	○		○	○	○	○		3
70	細川伊予守					○	○		3・4
71	細川土佐守			○	○	○	○		3
72	麻崎	○							不明
73	益田							○	5
74	町野	○		○		○	○	○	2
75	桃井	○		○	○	○			3・4
76	山名河口			○	○				3
77	山名草山	○							3
78	山名宮田			○	○	○	○		3
79	山名有道			○	○		○		3
80	山名鹿野			○	○				3
81	山名磯部			○					3
82	山名伊豆守			○	○	○			3
83	山名摂津守			○	○				3
84	吉見	○		○	○	○	○	御供？	4

明らかに国持外様に分類される家はこの表からは除外した。また種別は第二章で分類した番号になる。そのため種別1はこの表からは除外されている。

則村―範資―光範―満弘―教弘―教久―義村(政則養子)

元久―政資―政世―景隆

史料からは摂津守護として見える光範の後には、足利義持が満祐の代わりに備前を与えようとした満弘⁽³³⁾、播磨攻めの大口の一人として見える教弘⁽³⁴⁾が確認できる。教久は確認できないが、元久は「長祿」「大和九」「永享」の赤松新藏人であらうし、政資の子は政則の養子となって宗家を継いだ義村である。「明応」の赤松又次郎はこの政資か、その子政世になる。ただ他の赤松氏同様「永正」に見えず、以降外様衆としての活動も見えない。

4・5・6 赤松上月

まず上月大和守家は野田泰三氏の専論があり、その論考と「上月文書」⁽³⁶⁾、『蔭涼軒日録』を参考にすると、その系譜は次のようになる。

上月吉景―景久(大和守・勘解由左衛門尉)―貞景(甲斐守)

景氏(左近将監)―左近将監満吉―左近将監満秀

正長頃まで生存していた吉景の後には、景久の大和守・甲斐守家と景氏の左近将監家とに分かれ、外様衆となったのは惣領家となった景久系である。景久の子貞景は『蔭涼軒日録』から長享年間の活動が見え、「明応」にも見えるが、その後の動向は不明である。

次に上月治部少輔家である。赤松上月氏で治部少輔として見えるのは上月宗範⁽³⁷⁾のみだが、その族系は不明である。ただ「長祿」で赤松治部少輔入道に「有馬事也」と付していることや、文安・寛正頃の赤松治部少輔は赤松有馬家であることからすると、赤松有馬の一族である可能性が高い。つまり「長祿」の時点では、摂津有馬郡守護職を帯する有馬治部少輔持彦(入道道衍)・弥次郎直祐父子が外様衆であり、

応仁の乱で山名方についた持彦から守護職が有馬・元家に帰した以降は、元家の子孫が代々有馬郡守護を継承している。⁽³⁸⁾そのため弥次郎直祐は有馬を名乗らず上月を称し、直祐自身かその子が宗範であったと解するのが一番整合性が高いのではないかな。なお『蔭涼軒日録』長享三年七月十四日条に見える赤松廷尉は、廷尉が持彦の官途であったことからすると、宗範自身かその子を指すと思われる。その後の上月治部少輔家については不明だが、『言継卿記』天文二十一年六月廿九日条に見える奉公衆有馬治部少輔がその末裔であると思われる。

そして赤松上月兵庫頭家だが、これに関しては「明応」以外に見当たらず未詳というしかない。ただ前述の赤松中務家で言及した祐利が、明応頃に兵庫頭であったこと、中務家が「明応」に見えないことからすると、祐利が「明応」の時点で御供衆に昇格していなかったら、この兵庫頭は祐利であり、中務家を指すことができる。

7 赤松葉山

赤松葉山氏は赤松氏の庶流で、則村の子貞範の子孫である。その系譜は諸系譜によると、則村―貞範―則春―重弘―重清、となる。貞範の子則春は、安鎮大法供養で尊氏の帯刀を務めた赤松掃部助⁽³⁹⁾、「相国寺供養記」に葉山近江守源則春⁽⁴⁰⁾として見える。その後実名がわかる子孫は見えないが、義持の帯刀を務めた近江守満永⁽⁴¹⁾、義教帯刀を務めた掃部助持広⁽⁴²⁾は、その官途名から則春の子孫である可能性がある。「長祿」から「明応」まで外様衆として見えるが、それ以降は京都での活動は見えず、いつまで外様衆であったかは不明である。

8 姉小路向

公家姉小路氏は、飛騨国司と呼ばれ、室町期には古川・小島・向(小鷹利)の三家に分かれていたことが知られている。⁽⁴⁴⁾ただこのうち向家は、家熙が足利義満から右衛門佐任官を許されるなど、特に武家との関係が強い家である。また向家のみ古川・小島家と異なり、家熙以前の系譜関係が明らかではない。諸史料をもとにすると次のようになる。

？―家熙―〇―之綱―熙綱―宗熙―貞熙―宣政

後述する北畠小原と同様に、向家は幕府によって取り立てられ、公家の庶流でありながら外様衆に列することになったと思われる。

向家は在京していた古川家とは異なり、小島家と共に飛騨在国が通常であった。応仁の乱後は勢力を減衰させながら存続するが、幕府との関係は特別なものはうかがい知ることができず、外様衆というよりは、飛騨国司、在国公家の一つとして存立していたと思われる。その後向家は天正年間半ばに滅ぼされ、その遺児は常陸に逃れ、後に佐竹義宣の近臣向宣政となり、子孫は秋田藩家臣となっている。

9 荒川

荒川氏は足利一門で、南北朝期に詮頼が石見守護となっている。⁽⁴⁶⁾その守護職を改替された康暦元年⁽⁴⁷⁾以降の詮頼の消息は不明で、『尊卑分脈』に見える子治部少輔詮長、孫遠江守詮宣も史料上にほとんど見えず、わずかに応永十三年の時点で河内頼呂岐庄半分の本主である、おそらく詮長のことであろう治部少輔入道善政⁽⁴⁸⁾が見えるぐらいである。

荒川氏は「文安」では荒川八郎、「明応」では荒川治部少輔が外様

衆として見える。八郎については不明だが、治部少輔は「文安」に奉公衆五番として見える。官途名からすると、「文安」時点での治部少輔は詮宣の子と思われる。おそらく文安から明応までの間に八郎の系統が途絶えたなどで、治部少輔家がその名跡を継いで、奉公衆から外様衆となったのではないか。なお「明応」の荒川治部少輔は、文明十三年に見える治部少輔豊隆のことと思われる。その後の荒川氏は、豊隆の子と思われる治部少輔氏隆が、足利義晴の申次・内談衆として活動しており、その子と思われる晴宣も義輝の申次を務め、永禄八年には義輝と共に討死している。⁽⁵¹⁾ また別家ではあるが、足利義榮の申次となった荒川治部少輔⁽⁵²⁾もあり、室町最末期まで幕臣として活動し続けている。ただ氏隆が奉公衆二番として見えることからすると、義植・義澄期の動乱の中で奉公番方へ編入されたようである。

10 厳島

厳島氏は鎌倉時代以来厳島社神主を務めた藤原姓神主家である。⁽⁵⁴⁾ 島氏は教親の名が足利義教からの一字偏諱と見られるように、教親とその父親藤は、大内氏との関係も強めながら幕府との関係も重視しており、「長享」に見える厳島四郎⁽⁵⁵⁾宗親(教親子)になると、河内や近江への軍勢催促に応じ畿内へ兵を出している。この幕府への接近の背景には、社領回復の狙いがあり、実際幕府から奉書を得ている。⁽⁵⁶⁾ ただ結局思った程の効果は無かったようで、「明応」に名が見られないように、従来通りの大内氏との関係を重視していくようになる。その後も厳島氏が天文十年に滅びるまで幕府との直接関係は見られない。

11 一色兵部大輔

足利義視・義植の側近である一色視元が兵部大輔であったので、視元一族であろうが、守護一色氏との系譜関係は不明である。『尊卑分脈』で満範弟として見える兵部少輔範貞の子孫の可能性もあるだろう。ただ視元の子尹泰の代になると、永正七年頃には御供衆に昇格している(「永正」)。おそらく永正五年の義植の再上洛後に、それまで義植に付き従っていた功によって御供衆に加えられたのであろう。

12 一色宮内少輔

『尊卑分脈』を見ると、宮内少輔であった一色直氏の子氏兼と孫満直が宮内少輔とあるので、その子孫が外様衆となったと思われる。氏兼の活動は不明だが、満直は阿波守として見える。⁽⁵⁹⁾ 宮内少輔となった後に任官したのであろう。その後の系譜は『尊卑分脈』に見えず、不明であるが、応永二十六年に宮内大輔に任官した持重、永享九年に宮内大輔に任官した教貫⁽⁶¹⁾は満直の係累であらう。その後「文安」を挟んでしばらく宮内の官途を持つ一色氏は見当たらないが、「長享」で視冬が宮内少輔として確認できる。⁽⁶²⁾ 文亀頃には視冬の子と思われる宮内少輔材延⁽⁶³⁾があり、義植の申次として活動している。⁽⁶⁴⁾ その後の宮内少輔家は、天文五年に喧嘩で死んだ宮内少輔某⁽⁶⁵⁾、足利義昭に従った宮内少輔昭辰⁽⁶⁶⁾が確認できるが、最後まで外様衆であったか、御供衆や奉公衆に高下していたかは不明である。

13 一色次郎

一色次郎は「長享」にのみ見える。史料的には『蔭涼軒日録』に寛

正四年から五年にかけて三ヶ所見えるぐらいで、詳細は不明である。あるいは別の外様衆家の一色氏で、官途を名乗る前の状態が次郎である可能性もあるだろう。

14・15 一色右馬頭・一色北野

一色氏において右馬頭は、元々惣領家が任官した官途で、範光（権頭）・詮範・満範と代々任官しているが、義直以降は任官していない。とすると、惣領家から分かれた別家と思われる。さて惣領以外で史料上確認できる右馬頭は、宝徳二年に義政側室五伊上臈御局の父として見える「一色右頭」が挙げられ、これは翌年義政姫君を産んだ一色北野と同一人物であると高橋修氏が指摘しており、義貫の兄持範がこの右馬頭ではないかとしている。⁽⁶⁸⁾つまり一色右馬頭家と一色北野は元々同一であると言える。「大和九」では別々に記載されているが、寛正の頃には持範の息子の代で兄弟が別に家を立てていた可能性もあるだろう。ただ系図上で持範の子は、上杉氏から養子に入った政熙しか見えない。なお一色北野氏は応仁以降史料上からは確認できない。一方右馬頭家は、「永正」でも健在だが、これもその後史料に見えなくなる。政熙の子孫が江戸時代以降も続いているのとは対照的である。

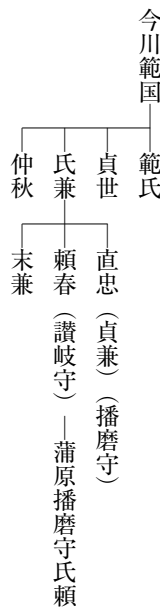
16 一色五郎

一色氏の中で五郎である者として、足利義教の近臣一色持信の子教親が挙げられる。教親は義貫が義教に殺されてから丹後守護を継承し、後には尾張分郡守護も回復し、伊勢守護にもなっているが、子がおらず断絶したようである。⁽⁶⁹⁾その後一色氏における五郎は、義直の弟で長祿・応仁に見える五郎政氏、義直の嫡子五郎義春・義秀⁽⁷¹⁾がいて、「明

応」の外様衆一色五郎、そして「永正」に御供衆の一人として挙げられる一色千松丸が尾張知多郡主五郎の子として見える。これらからすると、一色五郎家は守護・分郡守護の御供衆であり、「明応」に見えるのは、誤記、あるいは他の外様衆一色氏の子であろう。

17 今川蒲原

小和田哲男氏の研究によると、蒲原氏は次のような系譜になる。⁽⁷²⁾



蒲原氏は駿河蒲原庄を本拠地とする一族で、今川氏兼の子孫である。氏兼は了俊の九州行にも従い、日向を任され、氏兼の子直忠も日向で活動していることが小和田氏により指摘されている。永享年間の今川氏家督相続争いで出てくる播磨守は直忠の子か、甥にあたる頼春の子氏頼と思われる。ただしその後の蒲原氏と京都との関わりは不明で、史料上には「文安」に見えるのみである。応仁の乱を境にして、在国のみとなって外様衆からは離れたのかもしれない。十六世紀になると蒲原氏は今川家臣として見える。

18 今川堀越

堀越氏は、今川貞世（了俊）の子孫で、遠江の堀越・見付城（現磐田市）を本拠地とした一族である。⁽⁷⁴⁾系譜関係は次のようになる。



永享の今川家督相続争いに見える今川一族の中に、治部少輔入道貞相が見える。⁽⁷⁵⁾その後長祿三年に遠江へ打入ると風聞のある治部少輔⁽⁷⁶⁾は、貞相の子範将に比定される。『親元日記』寛正六年八月二日条によると、遠江・駿河の範将跡職が幕府から狩野氏に与えられている。また、同寛正六年十二月十七日条で義政へ御礼を進上している今川六郎は、範将の子貞延と思われる。ただ堀越氏も蒲原氏同様に、応仁の乱以降京都の幕府との直接的な関係は見えず、以後は駿河今川氏の有力一門として戦国期まで続いている。

19 四条上杉

四条上杉は犬懸上杉氏の一流で、関東管領と信濃守護を兼帯していた朝房に始まり、朝房が上洛してそのまま在京するようになって成立した家である。⁽⁷⁷⁾「上杉系図」(統群書類従所収)や諸史料をもとに系譜を作成すると次のようになる。

朝房 ── 持房 ── 教房 ── 政藤 ○ 材房 ── 虎千代 (幸松・次郎?)
朝宗 ──

朝房は「上杉系図」によると、弟朝宗の子持房を養子とした。持房は系図に中務少輔とあり、『満濟准后日記』永享二年正月七日条に、八条上杉中務大輔と別に見える上杉中務少輔が持房に比定される。その後「文安」に見える上杉三郎は、「上杉系図」で持房の子とされる教房に該当する。この教房は父持房が永享の乱時に関東に援軍として下向したように、享徳の乱で関東に下向し、長祿三年武蔵太田庄で戦死しており、⁽⁷⁸⁾その子政藤も関東で転戦している。⁽⁷⁹⁾政藤はその後上洛したようで、各番帳にも見え、『蔭涼軒日録』延徳二年二月十一日条に死去したことが見える「四条上杉」はこの政藤と思われる。政藤の子

か孫と思われる(系図上には見えず、史料上にも確定的ではない)材房は、長享元年頃から見える上杉幸松のことと思われ、名前からして明応の政変以前に元服したようである。以降は三郎として見え、⁽⁸⁰⁾永正元年には右衛門佐に任官している。⁽⁸¹⁾そのことからすると、「明応」の上杉中務少輔は、政藤と材房の間の世代の人物となるが、これについては不明である。その後材房は永正年間でも『後法成寺関白記』に活動が散見されるが、永正十六年六月十三日条に上杉後家が見え、「殿中申次記」同年正月に上杉虎千代が出仕していることからすると、永正十五年末から翌年六月までに死去したようである。その後京都では『後法成寺関白記』大永六年正月十三日条に上杉幸松(虎千代と同一かは不明)が見えるが、「種通公記」享祿五年六月廿二日条で、三好一党と共に切腹した上杉次郎を最後に史料上には見えなくなり、わずかに『後法成寺関白記』天文五年十一月十四日条に、上杉母が近衛尚通を訪問しているのが確認できるのみである。

20 上野

上野氏は足利一門で、南北朝期に石見・丹後守護となった頼兼⁽⁸³⁾の子孫が、奉公衆一番・二番・四番として見える。特に四番衆は『尊卑分脈』にも系譜が見える、申次となった民部持頼の系統を中心とした上野氏最有力の一族が所属していた。ただ外様衆としての上野氏は、「永正」にのみ見える上野才寿丸で、その脇に「上野上総猶子、始号右馬助、⁽⁸⁴⁾供衆之由被申之(磨消)」とある。この上野上総とは、「披露事記録」に「一色上野政直子として見える上総介のことで、「明応」の五番衆一色上総介と同一と思われる。そして才寿丸は同史料の御供衆一色上野刑部少輔と同一と思われるので、「永正」にしか見えない

ことから、外様衆ではなく御供衆であったとするのが妥当であろう。

21 江見

江見氏は美作江見庄を本拠地とする一族で、^(補注1)『薩涼軒日録』長享二年二月廿三日条では、亀泉集証が美作江見庄は江見三家上中下が散在して日本一の強所と述べている。その中で惣領家と言えるのが外様衆江見氏であろう。この外様衆江見氏は伊豆守を官途としており、『薩涼軒日録』にも伊豆守とその弟刑部丞祐経、他に新左衛門尉統継・八郎次郎などが見える。ただ応仁以前の動向は不明である。また「永正」に見えるように、大内氏の上洛と共に美作から上洛したようで、

おそらく大内義興の在京中は、外様衆として出仕していたと思われる。⁽⁸⁵⁾
その後の幕府との関係は不明で、尼子氏麾下として活動している。⁽⁸⁶⁾

22・23 北畠小原・北畠左衛門佐

北畠小原氏は北畠顕能の弟顕雄の子孫で、伊勢一志郡小原を名字の地とし、戦国期の歌人として有名な小原国永がいる。『系図纂要』によると次のようになる。

親房―顕雄―房雄―満顕―教顕―政治―熙顕

親治―国永―藤方具成

小原氏は、稲本紀昭氏の研究によると、⁽⁸⁷⁾「雑々聞書」⁽⁸⁸⁾応永二十二年に「小原殿」が小原城を落とされており、『満済准后日記』応永二十二年二月廿二日条では、伊勢国司に城を攻め落とされた唐橋入道が「公方様御扶持敷」とある。つまり唐橋＝小原であり、幕府と直結していることが窺える。同時期の関・長野氏の幕府との関係からすると、同様に義満から義持の時期に幕府との関係が強くなっており、これは

南朝勢力とも関係が深く、実際に満雅が反乱を起こした伊勢国司北畠氏を警戒した、幕府の対応によるものであった。

小原氏は『建内記』永享三年十二月廿七日条に「号北畠伊賀守小原也」とあるように、当初は誰もが任官するような受領官途だったようである。だがその後教雄（系図の教顕）が康正二年に正五位下、その子政治が文明八年に従五位上に叙されていることや、⁽⁸⁹⁾「薩戒記目録」永享十一年八月廿五日条に満顕が左衛門佐に任官したとあること、番帳に左兵衛佐とあることからすると、姉小路向と同等の扱いになっている。また長祿二年の幕府神宮方連署奉書案の宛所の一人に「小原」があり、前欠の別文書には「小原左衛門佐代」とある。となると、「大和九」では北畠小原左兵衛佐と北畠左衛門佐とが別に記載されているが、共に北畠小原氏で、父子である可能性があるだろう。

その後は国永まで史料上には見えないが、系図上の名前からすると、満顕から熙顕までは代々足利將軍より一字偏諱を得て、その後の親治は北畠材親（具方）から、国永は北畠具国（晴具）から一字偏諱を受けたようなので、その頃には幕府と疎遠になっていたのであろう。

24・30 西佐々木七頭（越中・能登・朽木・田中・永田・山

崎・横山）

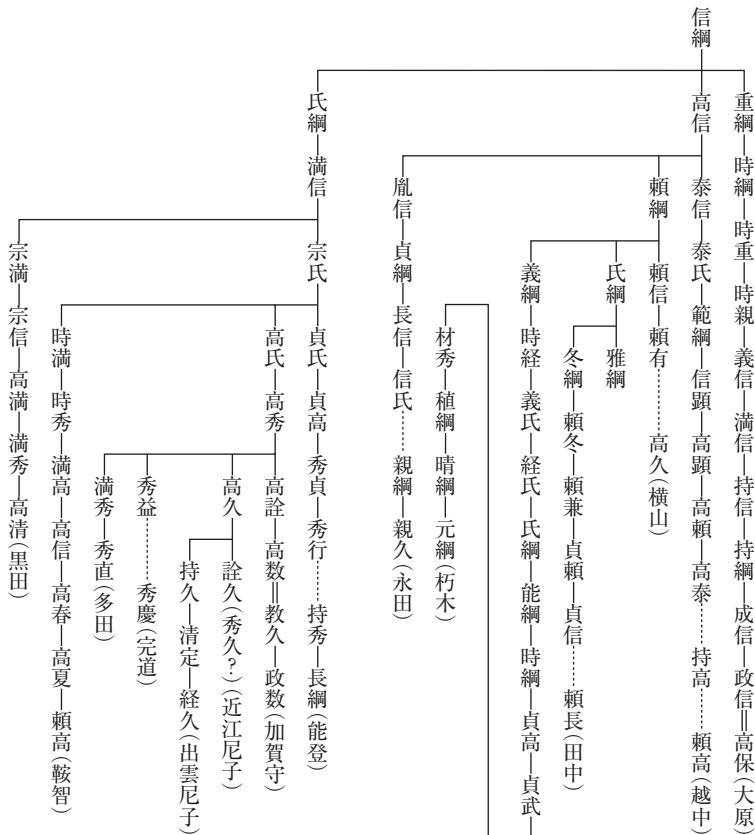
外様衆に係する近江佐々木氏の系譜関係を、『尊卑分脈』及び西島太郎氏の研究などによってまとめると次の系図1のようになる。

近江高島郡の西佐々木七頭と呼ばれる佐々木一族は、皆外様衆となっている。この西佐々木七頭は、先に挙げた西島氏の研究に詳しいので、詳細はそちらに譲り、ここでは簡単な概略と補足をしたい。

まず越中氏は、代々越中守であることからそれを家名とした。越中氏に限らず外様衆・奉公衆に名を連ねる佐々木一族は、その多くが将

軍の行粧に帶刀として供奉している。越中氏は長享頃まで帶刀を何度も務めている。また『後法興院記』明応元年十二月十二日条に越中息子が近江守護を仰付けられたとあるように、他の七頭よりも勢力の大きい一族であった。⁽⁹³⁾なお大永六年に、伊勢一族や奉公衆が本来務める布衣侍となっており、この頃には外様から外れていたかもしれない。

系図1 佐々木氏関係系図



能登氏は、一族の中での系譜関係が不明で、西島氏は貞氏系統に係するかとしている。能登氏は帶刀などは務めていないが、「文安」の「明応」を通じて外様に列している。『親俊日記』天文八年十月十八日条では、足利義晴の六角邸御成で御馬を引いており、六角氏との関係を強めながら、幕府との関係もこの頃までは保っていたようである。

朽木氏については多くの専論があるので、ここでは特に触れないが、当初からの外様衆と見られ、代々帶刀を務めている。そして義晴を朽木谷に迎えた植綱の時期に御供衆に昇格している。⁽⁹⁴⁾

田中氏は、越中・朽木氏同様に帶刀を代々務め、また西佐々木七頭の中では唯一長享の陣に参陣している。田中氏は足利義輝の元服に参加しているように、⁽⁹⁵⁾天文末までは幕府との関係が見られるが、その後は六角氏に包摂されていく。

永田氏は、応仁の乱以前の動向が不明で、文明以降確認されるようになり、帶刀も務めているが、六角征伐以降幕府との関係は見えなくなる。

山崎氏も一族の中での系譜関係が不明で、西島氏は他の六氏との血縁が薄く、六角との関係が強い一族だったのでとされている。『蔭涼軒日録』延徳四年四月三日条に六角方として討死した山崎がおり、これが外様衆山崎と同一ではないにしろ、「明応」に見えないのは、早い段階で六角家中への包摂が進んでいたからかもしれない。

横山氏は、山崎同様に帶刀としての供奉が確認されず、その点で幕府との関係は他の七頭ほど強くなかったか、低く見られていたかもしれない。いつまで外様衆であったか不明だ

が、横山慶千代名代が足利義晴に対面できたこと⁽⁹⁶⁾からすると、將軍直臣としては認識されていたようである。

31 佐々木鞍智

鞍智氏は道譽の弟時満に始まる。美濃鞍智郷を名字の地としている。清水克行氏の研究⁽⁹⁷⁾で指摘されているように、『碧山日録』筆者の太極と交流がある一族で、系譜関係も清水氏により明らかにされている。ただ鞍智氏は「明応」には見えず、史料上からも京都との関係では出てこなくなる。後に出雲尼子氏の一族衆として見えること⁽⁹⁸⁾から、出雲に下向してそのまま幕府との関係も疎遠になっていたのであろう。

32 佐々木黒田

黒田氏には、『花宮三代記』応安五年十一月廿二日条で評定始に列している道寿（高満）や、同康暦元年七月廿五日の拝賀で帯刀を務めているその子満秀⁽⁹⁹⁾があり、それ以降も高光・高清・清高・信秀・貞長などが帯刀を務めている。幕府との関係は永正年間⁽⁹⁹⁾を最後に見えなくなるようで、外様衆としてもその頃には外れていたと思われる。

33 佐々木宍道（完道）

宍道氏は高秀の子秀益から始まり、名字の地は出雲宍道郷である。『親元日記』文明十七年七月廿七日条などに見える「完道兵部少輔秀慶」、『親孝日記』永正十三年七月七日条の「完道兵部少輔」からすると、代々兵部少輔を官途としていたようである。そうすると『満済准后日記』正長二年三月廿一日条で黒田と帯刀の番の上臈をめぐって相論している兵部少輔、康正二年に帯刀を務めている兵部少輔も宍道氏⁽¹⁰⁰⁾

であろう。永正以降は出雲に在国して幕府とは疎遠となり、尼子氏一族衆として見える⁽¹⁰¹⁾。なお信長に京都から追われた後の足利義昭から御供衆に加えられている⁽¹⁰²⁾。

34 佐々木尼子

尼子氏は出雲尼子氏が著名だが、明応以前の京都での活動は見えないので、外様衆尼子氏は近江を本拠とした系統と思われる。足利義持から近江尼子郷を安堵された刑部少輔秀久⁽¹⁰³⁾はおそらく高久の子と思われる。その後はつきりと近江尼子氏とわかる者は見当たらないが、足利義熙の大将拝賀に帯刀として供奉している宮内少輔長綱が見える⁽¹⁰⁴⁾。

この宮内少輔の官途からすると、長祿二年に義政に供奉した宮内少輔国貞⁽¹⁰⁵⁾は長綱の父に当たるだろう。永正七年に足利義植から近江敵退治に出陣するよう命じられた佐々木一族の中に佐々木尼子刑部少輔⁽¹⁰⁶⁾が見えるが、その後の近江尼子氏と幕府との関係については不明である。

35 佐々木多田

多田氏は高秀の子満秀に始まる。満秀は義満の山門大講堂参向、義持の放生会参向に帯刀として供奉している⁽¹⁰⁷⁾。満秀は治部少輔として見えるので、宝徳・康正年間⁽¹⁰⁸⁾で帯刀を務めている治部少輔秀直⁽¹⁰⁸⁾はその子であろう。ただこの秀直の後の多田氏については不明である。

36 佐々木加賀守

加賀守家は、京極氏の家督となつてその諸守護職も務めた加賀守高数に始まる。高数が嘉吉の変で討死すると⁽¹⁰⁹⁾、家督は甥持清に移り、以後持清系が相承する。高数の子として『尊卑分脈』などには政宗が見

えるが、実はその間に教久がいる。教久は『建内記』嘉吉元年九月十九日条に佐々木大夫判官教久、『経覚私要鈔』宝徳元年八月廿八日条に佐々木加賀守教久として見える。『碧山日録』長禄四年三月六日条の、土岐氏出身で佐々木道統（高数 養子となって死去した「前賀州太守綱公」はこの教久を指すので、教久は高数養子であったことが分かる。そして教久の後に見えるのが政数である。政数は初名政宗であったと思われる、この政宗は系譜上高数の子とされている。そうすると、教久は政数が幼少であったために高数の養子になったとも考えられる。政数は『親元日記』文明十年十二月十二日条に「佐々木加賀左馬助政宗」とあり、『大乘院寺社雜事記』文明十八年七月廿九日条に「拝賀行列の帯刀を務める一人「同加賀守政数」として見えることからその間に改名・任官したのであらう。ただ加賀守家も「明応」以後は姿が見えなくなる。

37 佐々木遠江守

佐々木氏で遠江守となっている一次史料の事例は、明徳四年に山名満幸と共に挙兵した塩冶遠江入道の他に、『建内記』永享二年七月廿五日条で帯刀をしているのが見える遠江守高慶ぐらいである。ただ塩冶氏は奉公衆三番衆に複数家見えるため、遠江守家が塩冶氏である可能性は低く、遠江守家が佐々木氏のどの系譜につながるか不明である。

38 佐々木隠岐守

佐々木氏において隠岐守は、隠岐守護となった義清とその子孫隠岐氏の官途である。そのことからすると、外様衆佐々木隠岐守も、その一流と思われるが、具体的な系譜関係は不明である。隠岐氏は室町期

には京極氏の隠岐守護代だが、「明応」にのみ外様として見えるのは、その頃特別に幕府直臣扱いを受けて外様に列したのかもしれない。

39 佐々木大原

佐々木大原氏は「文安」から「永正」まで一貫して外様衆ではなく、奉公衆として見える。ただ「殿中年中行事記録」に佐々木大夫判官が外様衆に立ち帰り出仕したいと望んでおり（却下されている）、足利義政期以降の佐々木氏の大夫判官は大原氏のみであるので、佐々木大原氏は当初外様衆で、番衆に編入されたと言える。

40 里見

里見氏は美濃を本拠地としていたよう⁽¹²⁾で、「文安」と「明応」に奉公衆五番衆として見える。外様衆里見氏はその一族であることは確かであるが、他の史料上には見えず詳細は不明である。

41 末野

斯波氏経の子孫が末野氏であるという。「島本文書」⁽¹³⁾の斯波武衛系図や「武衛系図」（続群書類従所収）では、氏経の項に「末野氏自是出」とあり、義敏の子又三郎義延が末野の跡を継ぐとある。末野の名字の地は越前国丹生北郡末野と思われるが、現在その地に伝承などは残されていない。

42 関

関氏は北伊勢の国人である。小原・長野氏の当主が「満」の偏諱をもっているのに対し、関氏は持盛⁽¹⁴⁾が義持から「持」の字を与えられ

ている。これは関氏が北畠氏と関係が深かったため、小原・長野両氏よりも幕府との関係形成が遅かったことによる。また幕府側としては、北畠満雅の勢力を切り崩す目的であった。ただ結局関氏は満雅の挙兵に協力し、『満濟准后日記』正長二年三月六日条に見えるように没落している。関氏の復権は文安五年頃で、『師郷記』文安五年二月十八日条には、関氏の所領を得ていた長野氏と争っていることが見える。その後関氏は『大乘院寺社雜事記』長祿四年閏九月五日条にあるように、畠山義就退治に動員されたり、同応仁元年五月卅日条に伊勢氏が関・長野勢を引き連れて上洛したことが見えるように、幕府への奉公をしており、そうした奉公によって、大外様に列せられたのであろう。その後も関氏は、『蔭涼軒日録』明応元年十二月十三日条によれば、義植の御所の番をして夜盗を撃退しており、外様であったかは不明だが、永正年間までは幕府との関係を保っている。なお『言継卿記』弘治三年四月五日条には「奉公衆関」とある。

43 摂津

摂津氏は評定衆で、外様衆として幕府最末期まで確認できる。摂津氏については、拙稿を含め先行研究で多く述べられているので、詳細はそちらに譲り、ここでは特に触れない。

44 千秋

千秋氏は熱田社大宮司の一族で、南北朝期の高範以降大宮司となった家である。⁽¹⁵⁾千秋氏はこの高範の直系子孫が奉公衆三番で、他にも越前に在国する民部少輔系が五番、そして宮内大輔系が外様衆となっている。ただ高範直系以外の二家の系譜関係は不明である。外様衆千秋

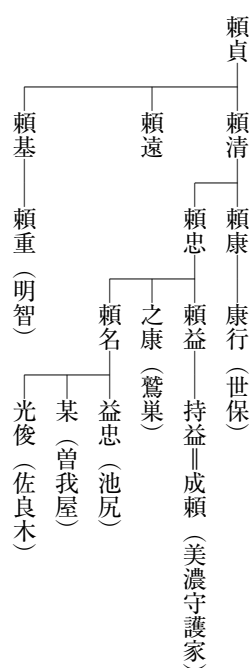
氏は「文安」と「長享」から宮内大輔を代々の官途としたとわかる。そうすると、「花宮三代記」応安七年四月廿八日条に見える千秋宮内少輔はその祖であると思われ、世代的に高範の子であるので、その頃に分流したと思われる。その後はしばらく史料上に現れないが、「文安」の宮内大輔は、長祿二年に跡職が義政から北野社に寄進された⁽¹⁷⁾範安と思われ、「長享」の尚範はその子か孫に当たるだろう。ただ大宮司家と言える三番衆千秋氏が室町幕府以降も京都にいたることが見えるのに対し（実は二流に分かれて一方が在地に残り大宮司職を継承した）、外様衆千秋氏は「明応」にも見えず、以降も史料上窺えない。

45 中条

中条氏は番帳などには外様衆として見えないが、「永享」に義政時代に自訴して外様衆から一番衆に編入したことが見え、外様衆であったことは確実である。中条氏は先行研究によれば、南北朝期の秀長が尾張・伊賀守護を歴任し、評定衆となっている。その後詮秀・満秀・満平と守護になること無く、將軍行粧の判官や帯刀を務めており、以降も同様である。奉公衆に転じたのが義政のいつの時代かは不明だが、おそらくは長祿以前であろう。

46 ～ 50 土岐（池尻・佐良木・曾我屋・鷲巢・明智）

土岐氏は一族から奉公衆を多く輩出しているが、外様衆となったのは、明智氏以外、康行が義満によって討伐された後に美濃守護となった頼忠系ばかりである。次に諸系図史料をもとに外様衆関連の部分を選抜した系図を次に掲げる。



土岐池尻氏は世保土岐の代わりに美濃守護となった頼忠の子である頼名の子益忠から始まるという。史料上からはほとんど見えず、『北野社家日記』延徳三年六月廿一日条で松梅院禪子から所領について書状を出されているのと、『実隆公記』明応七年二月廿八日条に娘が西園寺家に嫁いたことが見えるぐらいである。

土岐佐良木・曾我屋氏も池尻氏同様に頼名の子から始まるという。佐良木氏には成頼の子に始まるという系図もあるが、外様衆佐良木氏はそれだと年代が合わず、頼名の子のほうであろう。両氏ともに番帳にはしか見えず、幕府との関係や活動については不明である。

土岐鷲巢氏は頼忠の子之康に始まる。永享四年の右馬頭満康は、その改名後か、息子と思われる、『満濟准后日記』応永二十七年八月廿二日条では土岐刑部大輔と喧嘩して負傷している。その後しばらく史料上には見えないが、延徳頃に在京しており、『実隆公記』延徳元年八月廿六日条には出仕したことが見える。

最後に土岐明智氏だが、こちらは他の一族と違い、頼康の従兄弟頼重に始まる。子孫に明智光秀と近世大名土岐家があり、多くの系図が伝えられている。外様衆となっているのは中務少輔家で、他に奉公衆四番衆の兵庫家などがある。家伝文書が伝来している兵庫家と異なり、外様衆明智氏は、「明応」までは「文安」以外一次史料に見えないが、

「明応」に見える中務少輔政宣は、『実隆公記』明応七年閏十月十一日条に見えるように、奉公衆の頼連と共に連歌を得意としている。ただその後も明智氏は史料上には見えるものの、外様衆明智氏との関係は不明である。

なおこの外様衆土岐五家の中で池尻・佐良木・鷲巢・明智の四氏は『蔭涼軒日録』延徳三年五月十五日条に土岐一門の中で大身の七氏の一つとして挙げられている。

51 土肥

土肥氏は南北朝から將軍行粧で随兵・帶刀を務め、刑部少輔・美濃守を官途としていた。また奉公衆二番衆にも土肥氏があり、こちらは『薩戒記』応永二十六年八月十五日条などに見えるように衛府侍を務め、番帳からすると三郎左衛門尉・民部少輔を官途としていたようである。土肥氏の勢力は、応仁文明の乱後に、京極氏の勢力伸長や、拠点である番場宿の機能低下などによって衰退し、永正年間を最後に幕府との関係は見えなくなる。その後は在地勢力として京極・浅井氏に属したと思われる、『鳥記録』には、天文二年に今井秀俊が浅井亮政に討たれた時、「秀俊妻女ハ番場土肥か息女なりし」とある。

52 長野

長野氏は伊勢国人として知られる。系譜関係は『美里村史上巻』の記述・掲載史料などを参考にすると、次のようになる。

工藤氏……満高—教高—政高—政藤—尹藤—植藤—藤定—具藤

北畠小原・関氏の項で前述の通り、義満の頃にはすでに幕府から重

視されていたようだが、関氏と異なり、長野氏はほぼ一貫して幕府の軍事動員に応じて奉公していた。ただ番帳などからすると、小原氏が早くに外様に列したのに対し、長野氏は関氏と同じ頃に列した可能性が高い。長野氏は応仁の乱の時以外、基本在国しており、また「大和九」にのみ大外様として見えるため、いつまで外様であったか不明であるが、幕府との関係は、伊勢という地理的關係もあり、天文年間までは断続的に確認できる。なお奉公衆五番にも長野氏がいるが、こちらには官途などから外様となる長野氏と明らかに別である。

53 二階堂

二階堂氏は鎌倉時代以来の法曹官僚であり、室町幕府下では評定衆として活動している。系譜関係を『尊卑分脈』や史料から作成すると次のようになる。

貞衡—行元—忠広?—之忠—忠行—政行—尚行
有泰—晴泰

二階堂氏は南北朝期の動乱で多数あった一族もほとんど姿を消し、京都に残って評定衆となったのは行元の系統であった。以降は拙稿⁽¹²⁵⁾ですでに指摘した通り、政行の時代に勢力を伸ばし、取り立てられた義興が死去すると政治から遠ざかるが、その後も幕末まで外様衆・評定衆家として存続した。

54・55・56 仁木（丹波・伊勢・美濃）

仁木氏については稲本紀昭氏の研究⁽¹²⁶⁾があり、伊賀・伊勢・丹波の三系統については、そこで系譜関係や事例がほぼ挙げられている。ただ「大和九」にのみ見える美濃仁木氏については何も触れられていない。

「美濃」が誤記の可能性もあるが、もしそうでないならば、おそらく仁木中務少輔が該当するだろう。稲本氏も伊賀仁木政長と別に出てくる中務少輔について扱いかねているが、そもそも守護は国持外様で、本章で取り扱う外様衆とは別扱いであるし、番帳でも外様衆に一国守護は記載されていない。そうすると仁木中務少輔は美濃仁木氏となり、他史料との整合性もとれる。ただ他の仁木一族と異なり、美濃仁木氏の「明応」以降の活動は確認できない。

57 新田大島

新田大島氏は新田氏の一族で、里見氏の庶流である。南北朝初期には義政が活動しており、『尊卑分脈』には義政—義高—義世までが記されている。義政は当初南朝方として活動していたが、後に尊氏方に転じ、建武三年には周防大将に任命されている⁽¹²⁷⁾。義政の子義高は、延文五年の仁木義長の失脚後に三河守護となり、応安六年まで在職が確認される⁽¹²⁸⁾。そして永和三年に三河守護として「新田兵庫頭」が見える⁽¹²⁹⁾。義高は兵庫頭→左衛門佐→左衛門佐入道という官途変遷をたどり、その活動下限は応安末までで、かつすでに出家しているので、この兵庫頭は義高と別人であり、息子義世の可能性が高い。だが三河守護は康暦元年に一色氏へ交替し⁽¹³¹⁾、以後大島氏が守護となることはなかった。その後は、康正二年に美濃で段銭を納める「新田左衛門佐」⁽¹³²⁾、文明十四年の將軍家千首に参加している「大島兵庫頭高秀」⁽¹³³⁾が見えるが、「明応」を最後に姿は見えなくなる。明応の変後の政治状況の中で没落したのであろう。なお十六世紀に細川氏綱の家臣に大島左兵衛入道が見えるが⁽¹³⁴⁾、この新田大島氏との関係は不明である。

58 新田岩松

上杉禪秀の乱後に京都へ逃れた岩松満純の子家純に始まる。この京都岩松氏は結城合戦や享徳の乱で関東に下向し転戦している。⁽¹³⁵⁾ただ息子明純は京都にいたようで、『親元日記』寛正六年十二月廿四日条では義政へ御礼をしている。明純は『後法興院記』文正二年二月十六日条に関東に下向したことが見え、その後は関東に在国し続けることになるが（そのため「長享」には名が無い）、京都との関係は断続的に続いていたようで、明純の子尚純の「尚」は義尚（義熙）からの偏諱であろうし、天文年間には足利義晴から治部大輔に任じられている。⁽¹³⁶⁾

59 野間

外様衆野間氏は、幕府と関係する史料が番帳以外見えず不明である。野間氏には摂津野間氏、山名家臣野間氏、安芸野間氏、尾張野間氏とが知られるが、明応六年頃に若狭鉢興寺年貢を惣代官として年貢を請切る「野間左馬助入道」⁽¹³⁷⁾が注目される。若狭には文明五年に文書を出す野間之実⁽¹³⁸⁾もあり、これらは武田氏の若狭入部により安芸から移った者の一人と考えられる。安芸野間氏は、文安二年に尾張知多郡野間から入部した伝承があるので、外様衆野間氏は尾張野間氏か、それを祖とする安芸野間氏であつたと思われる。

60 波多野

波多野氏は鎌倉幕府以来の評定衆家の一つである。系譜関係の概略は湯山学氏の著書にあり⁽¹³⁹⁾、それに手を加えたものが左の系図である。

朝通——通貞——通郷——通春——通定——通弘——通直——通秀

波多野氏は越前や和泉に所領を持ち、評定衆として南北朝から正年間まで在京活動している。ただ他の評定衆と異なり、特に役職を持っていなかったことなどによるか、「守光公記」永正十二年閏二月十三日条に見えるように、越前に在国するようになり、幕府滅亡後もそのまま越前に土着した。

61・62・63 畠山次郎・駿河守・日向守

畠山一族は御供衆・奉公衆に一族が多く見られるが、外様衆の次郎・駿河守・日向守については、従来検討されていない。

まず畠山次郎だが、畠山氏において次郎は、基本的に管領家の仮名で、義就・義豊・義英・義就養子政国、政長・尚順・植長などが「次郎」として見えるが、むろんこれは外様衆ではない。畠山氏で他に次郎として見える者には、「花営三代記」に見える畠山阿波次郎持純と畠山伊予次郎持重（共に貞清の孫）⁽¹⁴⁰⁾がいる。持純の官途は右馬頭・阿波守であり、持重は中務大輔だが、畠山中務大輔は奉公衆三番の家柄である。残る持純について見ると、奉公衆に持純の官途を持つ者はいないこと、次郎家は「長享」以降外様衆には見えず、一方「明応」で御供衆畠山右馬助として見えるのが持純の子政純⁽¹⁴¹⁾であろうことなどから、持純の子で系図において仮名が不明な成純⁽¹⁴²⁾がこの外様衆畠山次郎で、弟政純の時期には御供衆に昇格していたとできるだろう。

駿河守については、明応の変の時に菅田城で討捕られた畠山勢の一人として見える。また時代は降り、天文十六年に能登畠山義総の弟である畠山駿河守が見える。⁽¹⁴³⁾これは出奔していた駿河守が能登押野へ入国しようとして紛争が起ったものであるが、このことからすると、駿河守家は能登守護の傍流であつた可能性もあるだろう。

そして日向守については全く不明である。あるいは南北朝期に日向守護であった畠山直顕の子孫であるかもしれない（その場合先祖が守護であったことを由緒として日向守を名乗ったことになる）が、室町期における直顕の子孫そのものの消息が不明である。

64 細川奥州家

奥州家は業氏の子孫で、業氏が陸奥守であったことから、子孫も代々陸奥守に任官し、それにより奥州家と呼ばれた。『尊卑分脈』などから系譜関係をみると次のようになる。

和氏——顯氏

業氏——滿経——持経——教経？——成経——尚経——尹隆——晴経
輝経——忠興

右で教経かとしている部分だが、『康富記』宝徳三年九月八日条に「細川奥州嫡子刑部大輔」が四十二歳で死去して嫡孫が相続したとある。少なくとも文安六年の足利義政の元服時点で持経は中務大輔⁽¹⁴⁾で、この時持経は理髪役を務めており、この直前に細川勝元・持賢・成賢が任官していることからすると、持経も任官したと考えられる。そうすると、もし先の「刑部大輔」が持経を指すとなると、四十近くまで無官であったことになり、家格から言っても不自然である。それ故に文安六年に持経は陸奥守となったとし、持経と成経の間に一代入れるのが妥当とし、そうであれば当主は代々將軍の一字偏諱を得ているので、教経という名の持経子がいいたのではないとした。

奥州家は「長祿」などに見えるように准国持扱いで、その点で他の外様衆とは一線を画する存在であり、その身分格式のまま幕府最末期まで存続した。なお輝経は後に細川藤孝の子忠興を養子とし、幕府滅

亡後は藤孝の許に身を寄せた。⁽¹⁵⁾

65 細川央章

南北朝期に斯波氏家臣として守護代をつとめる細川鹿草氏⁽¹⁶⁾がいるが、その子孫かあるいは本家筋に当たる一流であるか、詳細は不明である。「明応」から刑部大輔を官途としたことがわかるが、これは和泉上守護家も任官していた官途である。ただ明応頃の和泉上守護家は刑部大輔ではないので別人であろう。

66・67 細川天竺・弥六

細川天竺氏は、三河国幡豆郡天竺を名字の地とする。奉公衆一番衆にも同名がおり、「文安」に天竺駿河三郎、「永享」に細川天竺三郎、「長享」に細川天竺源命丸がいる。『大徳寺文書』に見える源頼秋は、文書の袖に「天竺殿」とあり、別文書に「ほそかハの三郎頼秋」とある。⁽¹⁵⁾『尊卑分脈』に駿河守頼顕がいるが、頼顕子満秋も三郎とあること、前述の駿河三郎の存在からすると、三郎頼秋＝頼顕となり、頼顕子孫が奉公衆一番衆になったと思われる。

一方『尊卑分脈』には頼顕弟に上野介義俊が見える。この子孫が外様衆細川上野介・天竺中務少輔と思われる。上野介は、史料上では文明十年から十三年に見えた後、⁽¹⁶⁾『後法興院記』明応三年六月七日条まで見えない。そしてその間の「明応」に天竺中務少輔（国範カ）が見えるのだが、中務少輔は上野介との関係が見られないだけでなく、細川典厩家の家臣として活動しており、⁽¹⁷⁾『蔭涼軒日録』文明十八年二月十八日・廿二日条からすると、細川持賢時代からの典厩家家臣天竺賢秀の近親者と思われる。となると何故中務少輔が外様衆となっている

かが問題となるが、おそらく上野介が何らかの理由で出仕できない状況にあったために、同族の中務少輔が代わりに番帳に名を連ねていたのではない。その後中務少輔は、『晴富宿禰記』明応四年九月十四日条によれば細川政賢の勘気を受けて逐電している。なお典厩家臣としての天竺氏は、幕府最末期の藤賢の頃まで確認できる。一方上野介家は、外様衆としては見えないが、永禄年間まで活動が確認できる。また「明応」にのみ見える細川弥六だが、これ以前に細川一族で弥六の仮名を持つ者は天竺義俊の次男元俊以外見当たらず、以後だと天竺弥六が見えるので、細川弥六とは天竺氏であると本稿は捉えておく。

68 細川観音寺

讃岐国観音寺を名字の地とする細川一族か。ただし系譜関係など詳細は不明である。「明応」の細川土佐守の右上に「観音寺」とあることからすると、土佐守家の分流とも考えられる。

69 細川駿河守

細川氏で駿河守として最初に見えるのは永享年間の氏家である。⁽¹⁵⁹⁾ 氏は『尊卑分脈』によれば鎌倉期に分かれた分家の出で、息子元家、孫政清との世代交代は特定できないが、文明・長享年間に駿河守家の存在は確認できる。⁽¹⁶⁰⁾ 「明応」の頃は政清であるのは間違いないだろう。その後野州家春俱の次男政光が政清の養子に入ったが、後に典厩家に入嗣したため（改名して尹賢）、その弟が駿河守家を継いだ。⁽¹⁶¹⁾ これが永禄・享禄頃に活動している細川駿河入道宗寅である。

駿河守家は天文年間の消息は不明だが、御供衆に昇格していたよう
で、永禄十一年に足利義栄將軍宣下に祇候せよと触れ回られた御供衆

の一人に「細川駿河入道」がいる。⁽¹⁶²⁾

70 細川伊予守

細川氏において伊予守であったのは、観応三年に任官した清氏、⁽¹⁶³⁾ 清氏が相模守となった後に伊予守となった繁氏⁽¹⁶⁴⁾ がいるが、その後しばらく誰も任官していない。次に見えるのは、享徳元年八月十五日に讃岐の琴弾八幡宮放生会祭祀配役記を記した伊予守信之⁽¹⁶⁵⁾ 之法常要である。

『系図纂要』によると、繁氏―祐氏―信氏―信之とあり、この信之は繁氏の曾孫に当たる。ただ「文安」の時点で伊予守家は外様衆ではなく、またこの一族の京都での活動もよくわからない。ここで寛正六年に伊予分郡守護として見える細川伊予守賢氏⁽¹⁶⁶⁾ に注目したい。この賢氏は『尊卑分脈』によれば細川上野氏益の子で元興の弟である。⁽¹⁶⁷⁾ 賢氏も本来ならば外様衆ではなかったと思われるが、伊予分郡守護となったことで、国持外様に準じる形で外様衆に列せられたのではない。実際に外様衆としては、「長享」と「明応」にのみ見えるからである。ただその後の伊予守家については不明である。

71 細川土佐守

土佐守家の細川一族内での系譜関係は不明である。史料上にも番帳以外では、永享三年に見える細川土佐入道常仙と、奉加帳に名を連ねる土佐守ぐら⁽¹⁶⁸⁾ いしか見えず、詳細は不明である。

72 麻崎

奉公衆の中だけでなく、当時の史料に一切見えない氏族で不詳。ただ「文安」の記述からすると、家格の高い家の庶流である可能性がある

り、あるいは今川一族の尾崎氏か。

73 益田

益田氏がはつきりと外様衆として見えるのは、足利義植に御供して上洛した宗兼以降であり、それまではどうであったかが問題となる。

「益田家文書」の中には、寛正年間に益田氏が正月に参賀した事例をまとめた注文⁽¹⁷⁾があるが、伊勢仁木と共に一重を下されている事例はあるものの、この史料からは外様衆として出仕したとまで言えない。むしろ外様・大外様ではなかったからこそ、義植期に褒賞として大外様に昇格したと考えるのが妥当ではないだろうか。「益田家文書」の外様関係の史料がこの宗兼の上洛中に集中しているのも、新しく編入されたこそ、伊勢氏などから故実や儀礼を学んだからとすれば自然である。そして参賀自体も、將軍直臣身分であれば御家人・国人も可能であったので、益田氏もそうした立場にあったのであろう。

さて大外様に列した益田宗兼は、大内義興と共に在京していたが、義興の帰国と共に石見へ戻ったと思われ、それ以後は在国し、その後も懸隔はありながらも將軍家との関わりは保たれており、宗兼の子藤兼は足利義藤（義輝）から一字偏諱を受けている。⁽¹⁸⁾そして藤兼の子元祥は、足利義昭から大外様たることを認められている。⁽¹⁹⁾

74 町野

町野氏⁽²⁰⁾は鎌倉時代以来の評定衆家で、南北朝期に関東に下向して以来鎌倉府に属していたが、それまで問注所氏として京都にいた太田氏が義教の勘気を受けたため、鎌倉にいた町野氏が京都に呼ばれ、以後問注所町野氏として在京した。その歴代は次の通りである。

町野入道―淳康―敏康―元康―康定（父子関係は実子かは不明）

天文年間に活動していた康定まで評定衆・外様衆であり続けたが、康定が史料上から見えなくなった以降の町野氏の消息は不明である。

75 桃井右馬頭

桃井氏は奉公衆二番衆番頭である桃井治部少輔・民部大輔家があるが、右馬頭は南北朝期の右馬頭直和⁽²¹⁾以外には、番帳にしか名が見えず不詳である。松山充宏氏は、この右馬頭系を直常・直信の弟直弘の子孫であるとしており、⁽²²⁾「両山歴譜」は日隆の父を直弘孫右馬頭尚儀としている。直弘は『尊卑分脈』で直常子とされているので、戦死した直和の跡を継いだとすれば、代々右馬頭であったとできるだろう。この系統は「長享」を最後に史料上から見えなくなるが、義植・義澄期の争いの中で、桃井氏は義植方として京都周辺で戦っており、その中で姿を消していったと思われる。

76 山名河口

まず山名氏の系譜を「山名家譜略纂補」・「山名系図」（続群書類従所収）・『尊卑分脈』などから、外様衆に關係のある部分を抜き出して作成すると、次の系図2のようになる。

山名河口氏⁽²³⁾は、山名氏清の次男満氏（一時期安芸守護）に始まる家で、伯耆東伯郡（湯梨浜町）に河口城があり、ここを名字の地とした。「山名家譜略纂補」では満氏に「河口参河守」と付している。満氏⁽²⁴⁾が実際に三河守であったことを裏付ける史料は無いが、『親元日記』寛正六年九月六日条に義政若君誕生御礼をしたことが見える「山名三河民部少輔」は、三河守を父に持つ民部少輔なので、満氏が教泰が三河

時氏

師義 — 義幸 — 師幸 — 持幸 — 撰津守家 — 遠江守

氏之（伯耆守護家） — 漉之 — 教之 — 豐之 — 政之 — 尚之

義漉（伊豆守家） — 伊豆守 — 豐達 — 刑部少輔

伊豆守

滿幸

義理 — 義清 — 教清（石見守護家） — 政清

掃部頭（山名有道家） — 掃部頭 — 掃部頭

氏冬 — 氏家（因幡守護家） — 漉高 — 勝豐 — 漉幸 — 中務少輔漉成（政理力）

氏清 — 時清（山名宮田家） — （山名磯部家） — 康漉……上総介 — 豐直

滿氏（山名河口家） — 清家 — 豐清

教孝（山名鹿野家） — 時久 — 政久 — 政泰 — 材泰

時義（物領家） — 時漉

駿河守（氏重？義治？山名草山家） — 漉綱 — 漉久

高義 — 漉高

77 山名草山

78 山名宮田

23

「宮田」は、寛正以降に見える民部少輔教実であろう。⁽¹⁸⁴⁾この教実は応仁の乱で山名一族の一人として参戦しており、『大乘院寺社雜事記』応仁元年六月十三日条には、丹波で父子共に細川方に討取られたことが見える。ただ家が断絶したわけではなく、この乱中に備後へ赴いた宮田民部少輔⁽¹⁸⁵⁾がおり、これは後に備後で活動する教言であろう。ただ教実との関係は不明である。教言は文明七年頃には備後守として見える。また「東寺執行日記」文明六年四月三日条に「山名宮田」が、『晴富宿禰記』文明十年四月十三日条に「山名宮田民部少輔」が見え、後者は教言の息子であるかもしれない。そして「長享」後の宮田氏は、惣領家に属したという。⁽¹⁸⁶⁾

なお直接の系譜関係は不明だが、庶流と思われる、惣領家の播磨郡奉行を務めた宮田親清・兵庫具重がいる。⁽¹⁸⁷⁾

79 山名有道

山名有道氏は丹後有道郷を名字の地としている。義理の子掃部頭に始まる石見守護家の分流であるが、「応仁記」に石見守護山名政清の伯父として山名掃部頭が見える。⁽¹⁸⁸⁾この政清の父は石見守護教清で、掃部頭はその兄弟ということになる。『満濟准后日記』永享四年十月十日条に、大内合力のために派遣された石見勢「山名掃部守」が見えるが、これが先の教清兄弟に当たるだろう。また時期的にこの掃部頭は『親元日記』寛正六年九月六日条に見える山名有道掃部頭と同一と出来る。いずれにせよ有道氏は石見守護家の庶家であることは間違いない。そのためか、政清の守護代としての活動も見える。⁽¹⁸⁹⁾

その後の有道氏は、文明十三・十五年に有道掃部頭豊泰が見える。⁽¹⁹⁰⁾豊泰は世代的に先の掃部頭の子か孫になるだろう。ただその後の動向

は不明である。なお長祿年間頃成立の「丹後国諸庄園郷惣惣田数帳」⁽¹⁹¹⁾には、有道郷に「山名有道殿」が見え、四ヶ村で卅四町九段百八歩を所有している。

80 山名鹿野

名字の地は丹後熊野郷鹿野か、因幡気多郡鹿野か、または別の地か判然としない。山名鹿野氏は氏清の子教孝に始まる。教孝は系図に鹿野遠江守とあり、応永二十五年に安芸高屋保半分内三分一を鄂隠和尚雑掌へ沙汰付するよう命じられている山名遠江守⁽¹⁹²⁾は、この教孝に比定される。教孝の子時久は系図に下野守とあるので、『親元日記』寛正六年九月六日条に見える、在国の地から若君誕生御礼を申し上げた山名下野守がこの時久に該当するだろう。そして「政所賦名引付」文明八年八月三日条に、宝鏡庵から借りた借錢三百七十五貫を無沙汰している事で訴えられた「山名右京亮政久」が見え、これが時久の子政久であろう。この時在京していたかは不明だが、少なくとも応仁の乱以前は在京していたことが窺える。政久の子兵部大輔政泰、政泰の子材泰は史料上に見えず不明だが、その名前から將軍より一次偏諱を受けていたと推測され、少なくとも十五世紀末までは幕府とのつながりを保っていたことがわかる。

81 山名磯部

但馬朝来郡磯部庄を名字の地とするか。この山名磯部氏は十五世紀を通じて全く史料上に姿が見えないが、天正年間に入り夜久野城主である磯部兵部大輔豊直がおり、この豊直は、『山東町誌上巻』によれば、山名上総（上野とも）介の子で、弟に豊次がいるとある。山名氏

で上総介は時氏の子高義とその子瀬高があり、瀬高の孫康瀬も上総介と系図にあることから、その子孫であろうか。ただし康瀬も、山名氏における上総介も、瀬高以降は一次史料には見えない。

82 山名伊豆守

伊豆守家は師義子義熙から始まる。義熙の活動はほとんど窺い知れないが、嘉慶二年六月十二日に伊豆守に任官していることが見える。⁽¹⁹⁵⁾その後『親元日記』寛正六年九月六日条に、在国の地から若君誕生御礼として太刀と千疋を進上している山名伊豆守が見える。「応仁記」に見える山名伊豆守⁽¹⁹⁶⁾と同一人物であろう。世代的には義熙の孫に当たる。そして『蔭涼軒日録』明応二年七月廿二日条に伯耆で村上氏等との合戦で討死したとある「伊豆守殿」はその子か孫と思われる。

83 山名撰津守

系譜上では義幸の孫持幸が撰津守とあるので、その子孫が撰津守家（戦国期には本拠地伯耆日野郡から日野山名氏と呼ばれる）となったのだらう。持幸という名を持つ者については史料上からは窺えないが、永享から寛正の間と思われる西国寺再興寄附帳に撰津守正旦⁽¹⁹⁷⁾が見え、そして「応仁記」には山名撰津守入道永椿と五郎宗幸が見えるので、宗幸は持幸の子であることから、正旦・永椿は持幸に比定される。

その後の動向は不明だが、天文六年に祖父以来当知行している京都の六角油小路半町を山名撰津守が安堵されている。⁽¹⁹⁹⁾これは大永年間の尼子氏の伯耆侵攻によって国外に退去したので、上洛することがあったためであろう。また『大館常興日記』天文十一年四月十三日条には、因幡三上氏を継いだ息子が幕府に出仕していることが見える。その後

山名撰津守（藤幸カ）は、永禄五年に毛利氏の後援を得て日野本城を奪取しているが、毛利氏を離反して尼子氏方として転戦している。⁽²⁰¹⁾

84 吉見

奉公衆一番に吉見伊予守、二番に石見吉見氏がいたが、外様衆となった吉見右馬頭家は、能登守護も務めた吉見氏頼が右馬頭であったことから、能登吉見氏系と思われる。そこで『系図纂要』・「諸家系図纂」や後述の事例などから系譜を復元すると次のようになる。

頼隆——氏頼

義頼——義範——満隆——家貞——家仲——義隆——仲益

義頼から満隆までは史料上確認できないが、応永十九年七月二日には右馬頭家貞が能登正院郷内所々を安堵されている。⁽²⁰²⁾「花宮三代記」永和五年二月十一日条で氏頼が存命であることからすると、家貞までは一代ほど多く入っているかもしれない。その後長禄三年に松平遠江入道に土地を売った右馬頭家仲が見え、そして吉見義隆が「長享」・「明応」に外様衆として見える。この義隆は義植の越中下向に付き従った一人⁽²⁰³⁾で、「永正」には外様衆として名が見えないが、『言継卿記』天文十四年正月十五日条に吉見仲益が御供衆として祇候していることから、義植に付き従っていた褒賞として、「永正」の頃には御供衆へ昇格していたのであらう。

二 外様衆の形成と役割について

前章では番帳や故実書に名前の挙がっている家についてそれぞれ見てきたが、これらの家をグループ分けすると以下の五つのグループに

分類される。

まず相伴衆・御供衆ではない国持守護で、半国守護家もここに入る。また分郡守護なども外様扱いであったと思われる(種別1)。

次に評定衆家の摂津・二階堂・波多野・町野である(種別2)。

次に有力守護の一族で、細川氏で言えば奥州家・天竺家などである(種別3)。まとめると次のようになる。

細川(奥州・宍草・天竺・伊予守家・駿河守家・土佐守家)

土岐(明智・池尻・佐良木・曾我屋・鷲巢)

佐々木(西佐々木七頭・鞍智・黒田・加賀守家など)

仁木(丹波・伊勢・美濃など)

赤松(上月・葉山など)

一色(北野・兵部家・宮内家・右馬頭家)

山名(有道・宮田・草山・磯部など)

また守護とは若干毛色が違うが、伊勢国司北畠一族の小原、飛驒国司姉小路一族の向などもここに該当する。

最後に右の三つに該当しない家だが、吉見・江見・桃井・四条上杉・千秋・野間・新田大島などがある。これらの家を見ると、南北朝期に守護であった元守護家が多いことに気がつく。新田大島は三河、吉見は能登、四条上杉は信濃・但馬、荒川は石見、桃井は越中・能登、また外様衆から番方に編入された中条も尾張・伊賀の守護であった。つまりこれらは守護を経験したことのある家である(種別4)。

しかし守護を歴任したことのない者もある。江見や千秋、長野等で、これらはその国での有力国人であり、また大神社の神主・宮司である(種別5)。彼等が外様衆として取り立てられたのは、複数国守護管轄国であったり、分郡守護など守護勢力の弱い地域の有力な勢力である

ことによると思われる。

さて外様衆と言っても、その中には外様と大外様、小外様との別があったが、そこにはどのような違いがあったのだろうか。そもそも大外様・小外様という言葉自体、幕府の年中行事書や故実書にもさほど出てこず、小外様に至っては、「殿中年中行事記録」ぐらいいしか見えない。大外様を記した史料も、故実書を除くと、はじめにで挙げた足利義昭御内書に見える「大外様とする」文書と、『益田家文書』ぐらいである。

さて、故実書の中での大外様の扱いを見ると、「長祿」では、将軍との御対面において惣番衆・上様御被官・奉行衆などと同等であることが見える。「長祿年中御対面日記」⁽²⁰⁶⁾では、正月四日の御対面次第で、外様は大名・番頭等と共に二番に、大外様は惣番衆・奉行衆等と共に三番に列せられていて、大外様よりも外様が上位にあることがわかる。そして「殿中年中行事記録」には、「大外様出仕之事」として、正月中六ヶ度面々出仕に同じとあるが、他の故実書と比較すると、これに該当するのは細川奥州・京極加賀家のみであり、細川奥州家が「大外様」として見えるのは永正以降なので、この史料が永正期の「大外様である益田氏に渡されていることからすると、この部分は義政期頃の大外様の実態を反映しているとは言えないだろう。

また「大和九」で大外様として挙げられている諸氏を見ると、伊勢の関・長野など通常在国している者が名を連ねているようである。同じ「大和九」に「大略定在国」とあることもそれを裏付けている。

以上から、元々の外様と大外様は、在国も認められているが、通常在京するのが外様衆、在国が通常なのが大外様で、前者がより格上とされていた。そして大外様の家格を与えられたのは、前述の各国に

において有力な勢力を持つ国人であったと思われる。ただ『益田家文書』所収文書などからすると、永正の頃には、在京・在国の有無は関係なく、外様衆の中で大外様と小外様とに分けられて再編成されたのであろう。十六世紀になって大外様が多く見えるのもその裏付けとなる。

ではこの外様・大外様はいつ頃形成されたのであろうか。これは奉公衆・御供衆・相伴衆にも通じるが、具体的にいつ形成されたかを明確に指し示す史料はない。奉公衆に関しては、義満期に成立し、遅くとも明德年間で、おそらくは永徳年間頃かとの指摘がある。⁽²⁰⁾相伴衆は二木謙一氏が、下地は義持期に確立したが、「御相伴衆」として確定したのは義教の永享期であつたとしており、⁽²¹⁾御供衆については同じく二木氏が、義政の寛正期以降であるとしている。⁽²²⁾外様衆のその他の階層より早く確立したとも考えにくいので、少なくとも奉公衆の成立以降であり、「文安」に外様衆が見えることや、長祿頃の国持外様が相伴衆でない者であることからすると、相伴衆と同じ頃の成立で、義持期に素地ができ、永享年間には成立したのではないかと考えられる。その点で「殿中年中行事記録」の、義教時代に名越治部大輔と小早川加賀守が外様身分に戻って出仕したいと訴えたという記述は示唆的である。ただしこの名越及び小早川加賀守に該当する人物は、永享年間はおろか室町戦国期を通じて見当たらず、名前に誤認があるかもしれない。なお文書・古記録などに「外様衆」の語が見えるのは、今のところ『山科家礼記』応仁二年四月二日条の「外様衆土肥刑部少輔」が初見と思われる。

そしてもう一つ外様衆の編成に関して触れねばならないのは、明応の変以前段階の外様衆と義材再上洛後の外様衆の編成に違いはあつた

のかということである。奉公衆に関しては、構成員が大幅に減つたために、番の構成員を極力変えずに縮小再編成されたと考えられるが、外様衆では前述のような大外様のあり方の変化があつたようだが、構成員そのものについては特に変化が見られず、御供衆に昇格している家はいくつか見られるぐらいである。また外様衆へ新たに加入する場合もあり、上洛した武田信虎や因幡の三上三郎が外様衆として見える。ただし在地勢力の衰退で在京もままならず、本国でも名が消えていく氏族もあり、やはり全体数としては減少していったと思われる。

外様衆はこうした異なる性格を持つ家々を編成したものであるが、奉公衆との違いは、番編成されているわけではないので、番頭あるいは番による行動の限定がない一方で、外様衆としての一体になるようなまとまりはなかった。またすでに指摘されていることだが、奉公衆から外様衆に、あるいは外様衆から御供衆へ昇格する場合もあれば、その逆に外様衆から奉公衆となる場合もあつた。

次に、外様衆は通常幕府内において何をしていたか、何の役割を与えられ、担っていたかについて検討したい。

「長祿」を始めた年中行事書などを見ると、正月には朔日・四日にに出仕し、細川奥州・京極加州家といった国持に准じる者は五ヶ日の出仕をしている。そして毎月一日・節句・十二月末日にも公家・大名と共に出仕することになっている。

次に挙げられるのが、佐々木一族や土岐一族のように、將軍行粧において帯刀として供奉していることである。ただしこれは外様衆全員に該当するわけではない。

そして禁裏警固・御門役が挙げられる。例えば『言国卿記』明応二年四月廿三日条を見ると、外様衆である細川駿河次郎が禁裏に参上し

て警固に外様衆が参ると述べている。また『康富記』嘉吉三年九月廿六日条には、禁闕の変に際して佐々木黒田と波多野が仮皇居となった伏見殿の西門・北門を警固しているのが見える。なおこの時四足門の警固を担当したのが管領畠山持国であり、東門警固を担当したのは駿河守護今川範忠である。つまり門警固は国持守護から外様衆が務めているのである。門役警固も、例えば將軍御所などは月毎に担当が決められて警固が行われていたので、この禁裏門役も外様衆に輪番で割り当てられていたと思われる。

また幾つかの家は、御台様付きとして、奉公・奉行衆と共に將軍御台所に近侍・供奉している。

最後に何故「外様」衆なのかについて考えてみたい。

「外様」とは、そとの方という意味だが、日本史用語としては、譜代の主従関係を持たない家臣、よそ者の意味であり、また鎌倉時代では御内人に対し、將軍と主従関係を持つ一般御家人が外様と称されていた。室町幕府の外様衆の内、種別2・4・5に含まれる家のほとんどがこれに該当するが、グループ3は足利一門や同じ源氏一流がほとんどであり、右の意ではややそぐわない。

さらに、相伴衆は將軍・室町殿に相伴することから、御供衆は將軍の御供をすることから呼称が来ており、評定に恒常的に参加する評定衆、年中行事の中で節句・朔日に仕仕する節朔衆、將軍の行列に徒歩で従う走衆というように、幕府の身分を示す諸階層は、基本的にその行動が文字通りに階層の名を示している。先ほどの外様の語句の意味からすると、外様衆のみ他の階層とは異なる由来を持つことになる。

ここで想起されるのが、公家による禁裏小番が内々と外様とに分けられていたことである。禁裏小番は元々嘉吉頃までは「禁裏小番」の

みであつたが、文明以降内々と外様に編成された。そしてそれぞれ「内々番衆所」と「外様」に祇候していた。⁽²¹⁾内と外とに祇候場所が分けられていたために、このような名称を帯びるようになったわけだが、それが幕府の「外様衆」にも当てはまるのではないか。つまり、大番役と呼ばれる武家の内裏門番役に対し、天皇近辺及び内侍所の警固をする公家の番は禁裏「小番」と呼ばれたわけだが、それが外と内にも分けられることから、武家の番を外様と呼び、それを務める家柄が外様衆と呼び習わすようになった、しかる後に文明以降禁裏小番の中で、さらに公家の中で内々と外様とに再編成されたのできるのではないか。まとめると、元々外様と称される階層があり、それに帯刀を務める家や、奉公方の中でも勢力のある家、家格の高い家を加えた集団が内裏門役を務めることで、「外様」衆と呼ばれるようになったとできるだろう。むろんこれは一試論にすぎず、なお検討すべき問題である。

おわりに

室町幕府の外様衆について、それを構成する各家とその性格、幕府において果たした役割などを論じてみた。外様衆の構成員は大まかに国持守護、評定衆家、(源氏の)有力守護一族、かつての守護家、有力国人の五種類に分けられる。そして幕府内では、定例の出仕の他には、將軍行粧への帯刀としての供奉、禁裏警固などを担っていた。

外様衆を含め、室町幕府の構成員は、応仁の乱、明応の政変、義植の上洛と義澄の没落といった大きな政治的動乱や、自らの経済基盤となる在地の動向などによって徐々に数を減らし、また編成そのものも

変化していったと考えられる。しかしそれが実際どのようなものであったのか、あるいは数多い將軍直臣の中で、なぜその一族が外様衆となった理由についても、まだ不明のままである。これはなぜ奉公衆に選ばれたかという問題にも通じるし、幕府の諸役職についても同前である。これらは室町幕府の構成のあり方を考える上で重要かつ検討されるべき問題であり、今後の課題である。

註

- (1) 二木謙一「室町幕府御相伴衆」、「室町幕府御供衆」(ともに同『中世武家儀礼の研究』吉川弘文館、一九八五年)。
- (2) 福田豊彦『室町幕府と国人一揆』(吉川弘文館、一九九五年)。
- (3) 室町幕府奉公衆各家についての研究は多く出されている。以下では本文中で用いない主な論文について列挙する。足助氏く鈴木勝也「中世足助氏に関する一考察」(『皇学館史学』一二号、一九七七年)、麻生氏く川添昭二「室町幕府奉公衆筑前麻生氏について」(同『九州中世史の研究』吉川弘文館、一九八三年)、伊奈氏く和氣俊行「伊勢宗瑞家臣伊奈弾正忠盛泰の出自に関する一考察」(『法政史論』二七号、二〇〇〇年)、大内氏く須田牧子「加賀の大内氏について」(『山口県地方史研究』九九号、二〇〇八年)、大館氏く設楽薫「足利義教の嗣立と大館氏の動向」(『法政史学』三一号、一九七九年)、同「大館常興略伝」(桑山浩然研究代表科研報告書『室町幕府関係引史料の研究』一九八九年)など、小笠原氏く二木謙一「室町幕府弓馬故実家小笠原氏の成立」(同『中世武家儀礼の研究』吉川弘文館、一九八五年)、武田信也「武家故実の地方展開に関する一考察」(1)(2)(『大分県地方

史』一七八・一八二号、二〇〇〇・二〇〇一年)、水野哲雄「室町幕府武家故実家京都小笠原氏の展開」(『九州史学』一四二号、二〇〇五年)など、葛山氏く杉山一弥「室町幕府奉公衆葛山氏」(『国史学』一七二号、二〇〇〇年)、佐竹氏く多田誠「室町幕府奉公衆美濃佐竹氏について」(『皇学館論叢』一七三号、一九九六年)、曾我氏く鈴木一行「沼津郷と領主曾我氏について」(『沼津市史研究』一五号、二〇〇六年)、田原氏く荒川良治「室町幕府小番衆豊後田原氏の成立―その歴史過程に関する政治的考察―」(『鷹陵史学』一八号、一九九二年)、遠山氏く三宅唯美「室町幕府奉公衆遠山氏について」(『年報中世史研究』一七号、一九九二年)、坪和氏く榎原雅治「美作国坪和庄と坪和氏」(『吉備地方文化研究』一六号、二〇〇六年)、本郷氏く大原陵路「若狭本郷氏について」(『福井県史研究』創刊号、一九八四年)・市川裕士「若狭本郷氏の動向と室町幕府・守護」(『若越郷土研究』五二―一五号、二〇〇七年)、松田氏く榎原雅治「備前松田氏に関する二つの考察」(『岡山県史研究』一〇号、一九八八年)、水主氏く澤井英樹「山城國水主城と国人水主氏について」(『歴史研究』(大阪教育大学)三六号、一九九九年)、三淵氏く金子拓「室町幕府最末期の奉公衆三淵藤英」(『東京大学史料編纂所研究紀要』一二号、二〇〇二年)、山下氏く森幸夫「室町幕府奉公衆山下氏」(『国史学』一四四号、一九九一年)、大和氏く阪田雄一「室町幕府奉公衆大和氏の動向」(『史翰』一四号、一九七七年)、伊藤正義「大和宗恕小伝」(『論集日本文学・日本語』3中世)角川書店、一九七八年)、古川元也「故実家大和宗恕管見」(『年報三田中世史研究』三号、一九九六年)、山本氏く弓倉弘年「奉公衆山本氏に関

する一考察」(『和歌山地方史研究』四三号、二〇〇二年)、湯河氏(弓倉弘年「戦国期紀州湯河氏の動向」(『南紀徳川史研究』六号、一九九七年)、同「戦国期紀州湯河氏の立場」(『田辺市史研究』一四号、二〇〇二年)、尾張の奉公衆(荒尾・雅楽・内海・芝山・千秋・藤民部・村上・山下)と奥田修「尾張の奉公衆と在地領主」(『年報中世史研究』一五号、一九九〇年)、美作の奉公衆(安東・角田・広戸・三浦)と渡邊大門「美作地域における奉公衆の研究」(『岡山地方史研究』一一九号、二〇〇九年)などがあり、この他自治体の通史編などにも記述があるが、そちらは割愛する。

- (4) 秋元大輔「室町幕府の外様衆」(『在野史論』二号、一九九一年)。

- (5) 西島太郎「近江国湖西の在地領主と室町幕府」(同『戦国期室町幕府と在地領主』八木書店、二〇〇六年)。また同「室町幕府奉公方と將軍家」(二〇一〇年日本史研究会報告)では、『益田家文書』を軸に大外様について検討している。

- (6) 「大館記(七)」(『ビブリア』八六号、一九八六年)。

- (7) 永正七年在京衆交名(『大日本古文書益田家文書之一』二六三号)。以後「永正七年在京衆交名」の出典はこれに依拠し、特に記さない。

- (8) 足利義昭御内書(『大日本古文書三浦家文書』一〇九号)。

- (9) 『大日本古文書益田家文書之一』二六一号(以後同じ)。これは土岐五郎政頼の求めにより伊勢貞藤が著した書である。この土岐政頼とは誰か。俗に土岐政房の嫡男で斎藤道三によって美濃を逐われた政頼(実名は頼武)が知られるが、筆者貞藤の死後の生ま

れなので、年代的に合わず、また仮名も次郎であったのですぐわない。その父政房も仮名次郎であるからこれも相当しない。また、土岐世保持頼の子が政頼で、系図では孫五郎とあり、寛正三年の時点で大膳大夫として見える(『蔭涼軒日録』寛正三年九月十一日条)。世保政頼は父持頼が義教により成敗されて守護職を剥奪されており、出仕自体も停められていたと思われるので、義政期に再出仕するにあたって、貞藤に殿中での儀について尋ねたのであろう。するとこの書の成立年代は、後世の人が書き改めていないと前提すれば、政頼が任官していない時代で貞藤が備中守となった後となり、長祿四年十一月から寛正三年九月以前となる。

ただ益田氏に渡された時点で加筆修正されている可能性が高い。

- (10) 『大日本古文書嵯川家文書之一』三〇・三一号。以後出典はこれによる。

- (11) 『群書類従第二十九輯』。以後出典はこれによる。

- (12) 今谷明「東山殿時代大名外様附」について―奉公衆の解体と再編―(同「室町幕府解体過程の研究」岩波書店、一九八五年)。以後出典はこれによる。

- (13) 『群書類従第二十二輯』。以後出典はこれによる。

- (14) 『群書類従第二十九輯』。以後出典はこれによる。また異本で数名が追加されている「室町殿在陣衆名簿」(史料編纂所架蔵写真帳)も含めている。

- (15) 山口県図書館所蔵写本。以後出典はこれによる。

- (16) 蓬左文庫所蔵写本。大和晴完が「宗五大草紙」を自らの知見を交えて加筆再構成したものである。

- (17) 前注2福田氏著書参照。

(18) 前注12今谷氏論文参照。

(19) 足利義政参内供奉帶刀交名(史料編纂所架蔵影写本「報恩院文書」)、『斎藤親基日記』寛正六年八月十五日条。

(20) 『実隆公記』文明八年四月十日条。

(21) 『放生会記』(『大日本史料第七編之十五』三五七頁)。

(22) 『普広院所蔵史料』(研究代表者山家浩樹二〇〇七、九年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書『分散した禅院文書群をもちいた情報復元の研究』二〇一〇年)。

(23) 満政が播磨守であるのは、『満濟准后日記』永享三年二月十二日条、同四年正月十三日条など。満政は文安二年父子共に討たれる(『師郷記』文安二年四月四日条)が、その子孫はいたようで、文明十六年に息子が赤松家督に取り立てられた「播州」(『大乘院寺社雜事記』文明十六年三月八日条)や、永正五年に討たれた赤松播磨守(『実隆公記』永正五年九月十四日条など)がおり、赤松氏で他に播磨守となった者がいないため、これらは満政の大河内家の流れを汲む者と現在理解されている(渡邊大門『戦国期赤松氏の研究』岩田書院、二〇一〇年、など)。

(24) 『大日本史料第八編之十一』二三三頁。外様衆としての始に祇候している。

(25) 「石野系図」(『続群書類従第五輯下』)。

(26) 「花宮三代記」応永二十九年九月十八日条。

(27) 「永享九年十月二十一日行幸記」(『加能史料室町Ⅲ』三〇頁)。

(28) 『康富記』享徳二年八月廿七日条など。なお長祿二年七月五日に帯刀を務める赤松中務少輔が見える(『任大臣大饗記』『加能史料室町Ⅳ』七四頁)が、別の史料では赤松弥五郎元貞となってい

る(史料編纂所架蔵影写本「報恩院文書」)。

(29) 「上郡町史第一巻本文編Ⅰ」所収。以下出典同じ。

(30) 「山科家礼記」応仁二年五月廿四日条、文明二年九月廿六日条など。

(31) 『蔭涼軒日録』延徳二年二月八日条、「拾芥記」永正十七年十二月十四日条など。

(32) 高坂好「赤松政則と天隠竜沢禅師」(同『中世播磨と赤松氏』臨川書店、一九九一年)。

(33) 『満濟准后日記』応永三十四年十月廿七日条。

(34) 「東寺執行日記」嘉吉元年七月十一日条。

(35) 野田泰三「戦国期赤松氏権力と国人領主」東播磨上月氏の事例を中心に(矢田俊文編『戦国期の権力と文書』高志書院、二〇〇四年)。

(36) 『兵庫県史料編中世九・古代補遺』所収。

(37) 「別本伺事記録」(『室町幕府引付史料集成下巻』五六五頁)。

(38) 有馬氏の系譜及び有馬郡守護については、小林基伸「有馬郡守護について」(『大手前大学人文科学部論集』二号、二〇〇一年)、高田義久「赤松有馬氏系譜」(『歴史と神戸』二五二号、二〇〇五年)など参照。

(39) 安鎮大法供養足利尊氏随兵交名(『朽木家文書』『加能史料南北朝Ⅱ』六頁)。

(40) 『群書類従第二十四輯』。

(41) 「放生会記」(『大日本史料第七編之十五』三五七頁)。

(42) 「建内記」永享二年七月廿五日条。

(43) 葉山氏は本郷・広岡氏と共に寛正六年に赦免を受けており

『親元日記』寛正六年八月九日条など)、これ以後外様衆となつたか、またはそれ以前から外様衆ではあったが、何らかの罪を得ていて復帰することになったかは不明である。

- (44) 姉小路氏については、岡村守彦『飛騨史考(中世編)』(岡村健守、一九七九年)、小川剛生「姉小路基綱について―仮名日記作者として―」(『国文学研究資料館紀要』三二号、二〇〇五年)、大藪海「北朝・室町幕府と飛騨国司姉小路氏」(『日本歴史』七三三号、二〇〇九年)などがある。

- (45) 『教言卿記』応永十二年五月十九日条に家熙が「参北山殿懸御目、即折帑百貫進上之、被宣下右衛門佐」とある。

- (46) 『後愚昧記』永和二年閏七月十六日条、「花宮三代記」同日条など。

- (47) 佐藤進一『室町幕府守護制度の研究下巻』(東京大学出版会、一九八八年)など。

- (48) 某契状(「東寺百合文書し函」『大日本史料第七編之八』六六五頁)。

- (49) 「賦引付一」(『室町幕府引付史料集成下巻』一三三頁)。

- (50) 『言繼卿記』天文六年正月一日条など。また『大館常興日記』天文九年五月廿五日条から、氏隆が詮頼の子孫であることがわかる。内談衆としての氏隆については、羽田聡「足利義晴期における内談衆編成の意義について―人的構成の検討を通して―」(『年報三田中世史研究』六号、一九九九年)、設楽薫「足利義晴期における内談衆の人的構成に関する考察―その出身・経歴についての検討を中心に―」(『遙かなる中世』一九号、二〇〇一年)など参照。

- (51) 『言繼卿記』永禄六年八月一日条、永禄八年五月十九日条。

- (52) 『言繼卿記』永禄十一年二月十三日条など。

- (53) 内閣文庫所蔵写本「雑々書札」。

- (54) 厳島氏については、秋山伸隆「南北朝・室町期における厳島神主家の動向」(『史学研究』二一四号、一九九六号)がある。

- (55) 厳島宗親請文案(史料編纂所架蔵写真帳「益田家文書」)、「長享」など。なお宗親の「宗」は伊勢貞宗からの一字偏諱と見られ、この点でも幕府への接近が窺える。

- (56) 室町幕府奉行人連署奉書案(「卷子本厳島文書」『広島県史古代中世資料編Ⅲ』四八頁)、またこの点は前注秋山氏論文参照。

- (57) 一色視元書状写(『大日本古文書相良家文書之一』一三八号)。

- (58) 一色直氏奉書(「武内大宮司古文書」『長門国二ノ宮忌宮神社文書』五号)。左京大夫の前官である。

- (59) 「花宮三代記」応永卅年三月廿四日条。

- (60) 『匿名土代』(湯川敏治編、続群書類従完成会、一九九六年)。

- (61) 「薩戒記目録」(史料編纂所架蔵写真帳) 永享九年三月十八日条。

- (62) 翌長享二年に伊予守に任官している「宮内少輔源視冬」が一色視冬である(史料編纂所架蔵写真帳「宣秀卿御教書案」)。

- (63) 「下つふさ集」(『私家集大成第6巻中世Ⅳ』八八三頁)。

- (64) 『実隆公記』永正五年七月七日条。

- (65) 『鹿苑日録』天文五年三月四日条。

- (66) 足利義昭御内書(『大日本古文書吉川家文書之一』五一六号)。

- (67) 範光は一色範光寄進状(「太宰府天満宮文書」『南北朝遺文九州編第三巻』三五八三号)、詮範は一色詮範書状(「鞍馬寺文書」『大日本史料第七編之八』三五頁)、満範は「相国寺供養記」(『群

書類従第二十四輯』による。なお義貫も「一華東漸和尚龍石藁」(『大日本史料第七編之十一』三一六頁)に「二色典厩」とあることから右馬頭であった可能性が高い。

- (68) 高橋修「応仁の乱前の一色氏に就いて——一色義直を中心として——」(小川信先生古稀記念論集『日本中世政治社会の研究』続群書類従完成会、一九九一年)。

- (69) 前注68高橋氏論文。

- (70) 『蔭涼軒日録』長禄二年十二月廿六日条、『経覚私要鈔』応仁元年六月十二日条など。

- (71) 『後鑑』所収「伊勢家書」、『親長卿記』長享元年九月廿五日条など。

- (72) 小和田哲男「今川一門蒲原氏の研究」(『小和田哲男著作集二卷』清文堂、二〇〇一年)。

- (73) 『満濟准后日記』永享五年閏七月廿五日条など。なお『満濟准后日記』応永三十五年二月十日条には、駿河伊豆境にいた今川播磨が自由出家して上洛したことが見える。

- (74) 堀越氏についての研究は、小和田哲男「戦国期の遠江今川氏「堀越氏」」(『小和田哲男著作集二卷』清文堂、二〇〇一年)、大塚勲「室町期の今川氏一族」(同『今川氏と遠江・駿河の中世』岩田書院、二〇〇八年)など。

- (75) 『満濟准后日記』永享五年七月十四日条など。

- (76) 幕府奉行人連署奉書(「南禅寺文書」『静岡県史資料編6中世二』二三四号)。

- (77) 四条上杉氏については、谷合伸介「八条上杉氏・四条上杉氏の基礎的研究」(『新潟史学』五一号、二〇〇四年)がある。

- (78) 足利義政御内書案写(「御内書案」『続群書類従第二十三輯下』二九一頁)。

- (79) 足利義政御内書案写(「御内書案」『続群書類従第二十三輯下』二九一、二九二頁)。

- (80) 『後法興院記』明応五年正月五日条、また同文亀三年六月十六日条には材房上杉三郎とある。

- (81) 史料編纂所架蔵写本「口宣案類集」。

- (82) 『群書類従第二十二輯』。

- (83) 前注47佐藤氏著書など。

- (84) 「披露事記録」天文八年六月七日条(『室町幕府引付史料集成上巻』一四二頁)。

- (85) 撰津政親書状(『大日本古文書益田家文書之二』二五五—二五七号)。

- (86) 長谷川博史「尼子氏的美作国支配と国内領主層の動向」・「河副久盛と美作倉敷江見久盛」(同『戦国大名尼子氏の研究』吉川弘文館、二〇〇〇年)。

- (87) 稲本紀昭「北畠国永『年代和歌抄』を読む」(『史窓』六五号、二〇〇八年)。

- (88) 内閣文庫所蔵写本。

- (89) 『歴名土代』(湯川敏治編、続群書類従完成会、一九九六年)。

- (90) 「伊勢両宮解決写」(『美里村史上巻』四四号d)。

- (91) 「伊勢両宮解決写」(『美里村史上巻』四四号e)。

- (92) 西島太郎「戦国期室町幕府と在地領主」(八木書店、二〇〇六年)。

- (93) 史料編纂所架蔵影写本「石清水武家社参記」。ただ行粧に帯刀がないので、代わりに布衣を務めたとも考えられ、一概に外様

衆で無くなったとは言えず、この点はなお検討を要する。

- (94) 朽木植綱御供衆留書『朽木文書第一』一〇〇号。
- (95) 「光源院殿御元服記」(『群書類従第二十二輯』)。
- (96) 「雑条」(『ビブリア』八八号、一九八七年)。
- (97) 清水克行「ある室町幕府直臣の都市生活―『碧山日録』と「春公」についてのノート―」(同「室町社会の騷擾と秩序」吉川弘文館、二〇〇四年)。
- (98) 竹生島造宮奉加帳(「竹生島宝厳寺文書」『出雲尼子史料集』三九二号)。
- (99) 足利義尹御内書案(内閣文庫所蔵写本「御内書案乾」)。
- (100) 足利義政大将拝賀之記(史料編纂所架蔵影写本「二階堂文書」)。
- (101) 前注98文書。
- (102) 真木島昭光副状(「光源院文書」『宍道町史史料編』一六二号)。
- (103) 足利義持袖判御教書(「佐々木文書」『新修彦根市史第五卷史料編古代・中世』二四七号)。
- (104) 『親長卿記』文明十八年七月廿九日条など。
- (105) 足利義政参内供奉交名(史料編纂所架蔵影写本「報恩院文書」)。
- (106) 足利義尹御内書案(内閣文庫所蔵写本「御内書案乾」)。
- (107) 延暦寺大講堂供養交名(「朽木文書」『加能史料室町Ⅰ』四一頁、「放生会記」(『大日本史料第七編之十五』三五八頁)、「清原良賢記」(『大日本史料第七編之二十七』三〇五頁)、『薩戒記』応永二十六年八月十五日条など)。
- (108) 『経覚私要鈔』宝徳元年八月廿八日条、足利義政大将拝賀之記(「二階堂氏正統家譜」『鹿児島県史料旧記雑録拾遺家わけ』一〇八号)。
- (109) 『斎藤基恒日記』嘉吉元年六月廿四日条など。
- (110) 三刀屋菊松丸軍忠状写(「諸家文書纂」『大日本史料第七編之二』一五九頁)。
- (111) 佐々木大原氏については、太田浩司「湖北における奉公衆の動向―佐々木大原氏を中心として―」(『駿台史学』八三号、一九九一年)がある。
- (112) 滝川恒昭「美濃里見氏小考」(『千葉史学』五〇号、二〇〇七年)。
- (113) 九州大学附属図書館付設記録資料館九州文化史資料部門所蔵。
- (114) 実名は「花宮三代記」応永二十九年九月十九日条による。
- (115) 南北朝以降の摂津氏に関する論考は、拙稿「二階堂政行と摂津政親」(阿部猛編『中世政治史の研究』日本史料研究会、二〇一〇年)の注1参照。そこに載っていないものとしては、細川重男「摂津と京極―鎌倉・室町領武家政権支配層の相違点―」(阿部猛編『中世政治史の研究』日本史料研究会、二〇一〇年)がある。
- (116) 藤本元啓「熱田大宮司家と足利將軍家」(『神道古典研究会報』一三号、一九九一年)。
- (117) 足利義政寄進状(「北野神社文書」『福井県史資料編2中世』一〇号)。
- (118) 村田正志「三河中条氏及び中条氏文書の研究―猿投神社文書調査概要―」(『国学院雑誌』六七―六号、一九六六年)、吉井功兒「小野系中条氏研究へのアプローチ―鎌倉・南北朝期を通して―」(『ヒストリア』一一八号、一九八八年)、鈴木勝也「中世三河中条氏考」(『日本学研究』六号、二〇〇三年)、同「中世猿投

社と三河中条氏」(『皇学館論叢』三九—五号、二〇〇六年)。

- (119) 土岐の諸一族について述べた研究に、谷口研語『美濃・土岐一族』(新人物往来社、一九九七年)がある。

- (120) 「御前落居記録」(『室町幕府引付史料集成上巻』四五頁)。

- (121) 明智氏については三宅唯美「室町幕府奉公衆土岐明智氏の基礎的整理」(『マージナル』九号、一九八八年)がある。

- (122) 「師守記」康永四年八月廿九日条など。

- (123) 「米原町史通史編」三九〇—三九八頁。

- (124) 「米原町史通史編」三九七頁。

- (125) 前注115拙稿。

- (126) 稲本紀昭「伊賀国守護と仁木氏」(『三重大学教育学部研究紀要』三八号、一九八七年)。

- (127) 「梅松論」。また南北朝期の新田大島氏について、加藤克己「南北朝時代の渥美半島 三河守護新田大島義高の時代(1360・70年代)を中心に」(『研究紀要(渥美町郷土資料館)』四号、二〇〇〇年)がある。

- (128) 沙弥某奉書写(『祇園社記続録』「愛知県史資料編9中世2」二四二号)。

- (129) 管領細川頼之奉書写(『尊経閣文庫所蔵將軍代々文書』「愛知県史資料編9中世2」三〇六号)。

- (130) 足利尊氏御判御教書写(『蜷川親治氏所蔵文書』「群馬県史資料編6中世2」九四九号)、足利義詮御判御教書案(『春日大社文書』「愛知県史資料編9中世2」六六号)、前注128文書。

- (131) 「後愚昧記」康暦元年閏四月廿一日条。

- (132) 「康正二年造内裏段銭并国役引付」(『群書類従第二十八輯』)。

また『蔭涼軒日録』長祿三年十二月十七日条にも見える。

- (133) 「將軍家千首」(『大日本史料第八編之十四』六一五頁)。

- (134) 細川氏綱書状(『安倍家文書』「岡山縣古文書集第四輯」五号)。

- (135) 家純の関東での動向や岩松氏に関する研究として、佐藤博信「室町期新田岩松氏に関する考察」(『正本文書』・「松陰私語」の検討を中心として)「同『古河公方足利氏の研究』校倉書房、一九八九年)などがある。

- (136) 足利義晴御内書案写(『往古御内書案』「ビブリア」八三号、一九八四年)。

- (137) 若狭国鉢興寺年貢注文(『明王院文書』「福井県史資料編2中世」六号)。

- (138) 野間之実書状(『明通寺文書』「福井県史資料編9中・近世7」七三三)。

- (139) 「広島県史中世」四八八頁。

- (140) 湯山学「波多野氏と波多野庄」(『夢工房』一九九六年)。

- (141) 「花宮三代記」応永廿八年正月二日条、応永卅年十一月二日条など。

- (142) 「草根集」(『加能史料室町Ⅱ』二七〇頁)、「室町第和歌打聞記」(『実隆公記第九卷』所収)。

- (143) 「犬追物日記」(『後鑑卷二』九五四頁)。

- (144) 政純は「応仁記」(『群書類従第二十輯』)に右馬頭政純として見える。ただ政純については、北西弘「蓮能尼の生涯」(『教化研究』七〇・七一号、一九七三年)に見えるような別の系譜関係を示す系図もあり、この点なお検討を要するだろう。

- (145) 「阿島山系図」(『続群書類従第五輯上』)。なお政純は弥四郎と

ある。

- (146) 『親元日記』 文明十三年七月十五日条ですでに御供衆として見える。

- (147) 『蔭涼軒日録』 明応二年五月五日条。

- (148) 『天文日記』 天文十六年閏七月十六日条。

- (149) 『花宮三代記』 永和三年八月十三日条など。それまでの兵部大輔は同年に業秀が用いているので、その任官の前に陸奥守となつたのであろう。

- (150) 史料編纂所架蔵写真帳「宝徳元年足利義成元服記」(「広橋家記録」所収)。

- (151) なおその後の輝経については、福原透「角田因幡守入道宗伊・細川陸奥守入道宗賢の事蹟について」(『熊本史学』七四・七五号、一九九八年) 参照。

- (152) この鹿草氏については、小川信「足利一門守護発展史の研究」

(吉川弘文館、一九八〇年) に言及がある。

- (153) 中田みのる「天竺氏」(『ぐんしよ』六五号、二〇〇四年)。

- (154) 『大日本古文書大徳寺文書之十二』二七三一号。

- (155) 『大日本古文書大徳寺文書之十二』二九八四号。ただ二七三一号とは若干花押形が異なる。また細川頼顕亮券(『大日本古文書大徳寺文書之十一』二七三三三号)の細川三郎頼顕とは、花押形が全く異なっており、これらが全て同一人であるか検討を要する。

- (156) 「政所賦銘引付」(『室町幕府引付史料集成上巻』三二〇頁)、「賦引付」(『室町幕府引付史料集成下巻』三八頁)。

- (157) 『蔭涼軒日録』 長享元年十二月十六日条、「晴富宿禰記」明応四年九月十四日条など。

- (158) 『後法成寺関白記』 永正七年三月十六日条、大永六年正月十五日条、「言国卿記」明応七年十一月卅日条など。

- (159) 「御前落居記録」(『室町幕府引付史料集成上巻』三六頁)。

- (160) 松林院兼雅書状(『大乘院寺社雜事記紙背文書』『伊賀市史第四巻資料編古代中世』五五九号)、「北野社家日記」長享二年十一月十六日条など。

- (161) これについては岡田謙一「細川右馬頭尹賢考」(阿部猛編『中世政治史の研究』日本史料研究会、二〇一〇年) 参照。

- (162) 幕府供衆参勤触廻文案(『大日本古文書蜷川家文書之三』八一号)。

- (163) 「園太暦」観応二年六月廿六日条。

- (164) 仁木頼章奉書(『熊野早玉神社文書』『南北朝遺文中国四国編第三巻』二七七七号)。清氏が相模守として見えるのは文和三年以降である。

- (165) 「観音寺文書」(『香川県史8資料編古代・中世史料』二号)。

- (166) 細川賢氏禁制「観念寺文書」(『愛媛県史資料編古代中世』一四〇三号)。

- (167) ただ当時の幕府の官途秩序からすると、伊予守は通常の受領よりも上位に位置付けられていた官であり(『大館常興書札抄』「群書類従第九輯」、庶子がとうてい名乗りうる官ではないので、信之の養子となっていた可能性が高い)。

- (168) 「御前落居記録」(『室町幕府引付史料集成上巻』三三三頁)。

- (169) 奉加帳(「護国寺文書」『兵庫県史史料編中世』三三三号)。

- (170) 益田兼堯室町殿正月参賀出仕注文(『大日本古文書益田家文書之一』一一三三号)。

- (171) 足利義藤一字書出（『大日本古文書益田家文書之一』二八一号）。
- (172) 足利義昭御内書（『大日本古文書益田家文書之二』三六五号）。
- (173) 室町期の町野氏に関する研究としては、新田一郎「問注所氏」小考―太田氏を中心に―（『遙かなる中世』八号、一九八七年）がある。
- (174) 『満濟准后日記』永享六年二月廿二日条に町野を呼ぶか詮議されており、『康富記』嘉吉二年六月四日条で死去した「問注所町野―入道」が京都と呼ばれた人物であろう。
- (175) 桃井直和書状（『大日本古文書醍醐寺文書之十二』二六七六号）。
- (176) 松山充宏「観応の擾乱以後の桃井氏の動静（一）―奉公衆二番頭桃井氏について―」（『富山史壇』一二六号、一九九八年）。
- (177) 『寝屋川市史第三卷』二七八号。
- (178) 宮田靖國編著『山名家譜』（山名家譜刊行会、一九八七年）所収。
- (179) 山名河口氏については、宮田靖國「『山名家譜略纂補』雑感」（『山名』1号、一九九三年）が言及している。
- (180) 『鳥取県史2中世』、『大栄町誌』など。
- (181) 足利義持御判御教書案（『地蔵院文書』『大日本史料第七編之十五』三四七頁）。
- (182) 「応永記」（『群書類従第二十輯』）。
- (183) 足利義持袖判御教書案（『近衛家文書』『大日本史料第七編之十二』一六五頁）。
- (184) 『蔭涼軒日録』寛正三年十月十三日条、文正元年閏二月廿九日条など。なお同文正元年三月三日条に見える宮田宮内大輔は教実の子か。また『康富記』宝徳元年九月十三日条に「故山名刑部少輔子宮田」が丹波に打ち入っているが、この故刑部少輔は山名時熙の子で持豊の兄持熙で、その子が宮田を名乗っている。ただ時清系との関係や教実・教言との関係は不明である。
- (185) 「応仁記」（『群書類従第二十輯』）。
- (186) 細川勝元書状写（『小早川家証文』『大日本古文書小早川家文書之二』一七八号）。
- (187) 小早川元平書状案写（『小早川家証文』『大日本古文書小早川家文書之二』二〇二号）、毛利豊元議状（『大日本古文書毛利家文書之二』一五一号）。
- (188) 宮田靖國「『山名家譜』論考―応仁の乱を中心として―」（前注178宮田氏編著所収）。
- (189) この二人については、稲垣翔「播磨国における山名氏権力の地域支配構造―郡単位の統治機構に注目して―」（『年報中世研究』三五号、二〇一〇年）参照。また他に備中新見庄公文にも宮田氏がいるが、山名宮田氏との関係は不明である。
- (190) 『群書類従第二十輯』。
- (191) 山名政清遵行状案（『北野神社文書条々引付』『美作町史資料編I』四八一頁）。
- (192) 『親元日記』文明十三年十一月十八日条、同十五年十月十七日条。
- (193) 『舞鶴市史史料編』五三五頁。
- (194) 管領細川満元施行状（『大日本古文書平賀家文書』一四二号）。
- (195) 史料編纂所架蔵写真帳「兼宣公御教書案」。
- (196) 『群書類従第二十輯』三七八頁。
- (197) 「西国寺文書」（『広島県史古代中世資料編IV』三号）。

(198) 『群書類従第二十輯』三六八頁。

(199) 室町幕府奉行人連署奉書〔「革島文書」『室町幕府文書集成奉行人奉書篇下巻』三三七五号〕。

(200) 鳥取県史ブックレット4『尼子氏と戦国時代の鳥取』（鳥取県、二〇一〇年）。

(201) 前注200書、前注86長谷川氏論文。

(202) 「新玉津島社歌合」〔「大日本史料第六編之二十七」八四八頁〕。

(203) 足利義持袖判御教書写〔松雲公採集遺編類纂一三六〕『加能史料室町Ⅰ』三一八頁。

(204) 「政所賦銘引付」文明九年十月十七日条〔室町幕府引付史料集成上巻』二九八頁〕。

(205) 羽田聡「足利義材の西国廻りと吉見氏——一通の連署状から——」〔『学叢』二五号、二〇〇三年〕。

(206) 『続群書類従第二十三輯下』。

(207) 森幸夫「室町幕府奉公衆の成立時期について」〔『年報中世史研究』一八号、一九九三年〕。

(208) 二木氏前注1論文。

(209) 二木氏前注1論文。

(210) 『言継卿記』永禄二年八月一日条など。

(211) 『言継卿記』永禄二年九月一日条。

(212) なお門役について、吉田賢司「室町幕府の内裏門役」〔『歴史評論』七〇〇号、二〇〇八年〕がある。

(213) 明石治郎「室町期の禁裏小番——内々小番の成立に関して——」〔『歴史』七六号、一九九一年〕。

(補注1) 江見氏について、渡邊大門「美作江見氏の基礎的研究」

〔『岡山地方史研究』一二二号、二〇一〇年〕がある。